

19

210

基督教証拠論

020452-000-1

19-210

基督教証拠論

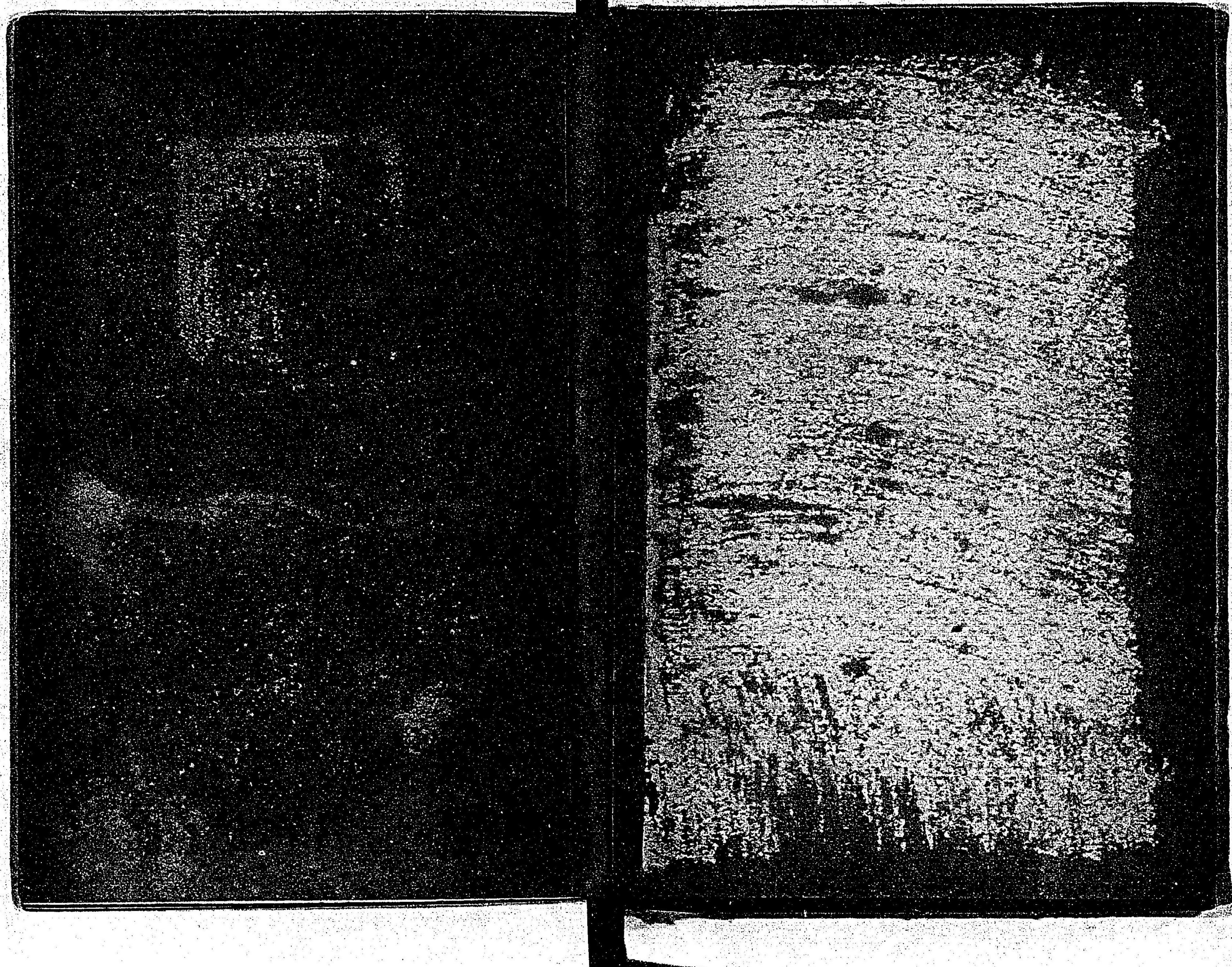
ジョルヂ・ピー・

フヒツシヤル / 著

M24

ABI-0262





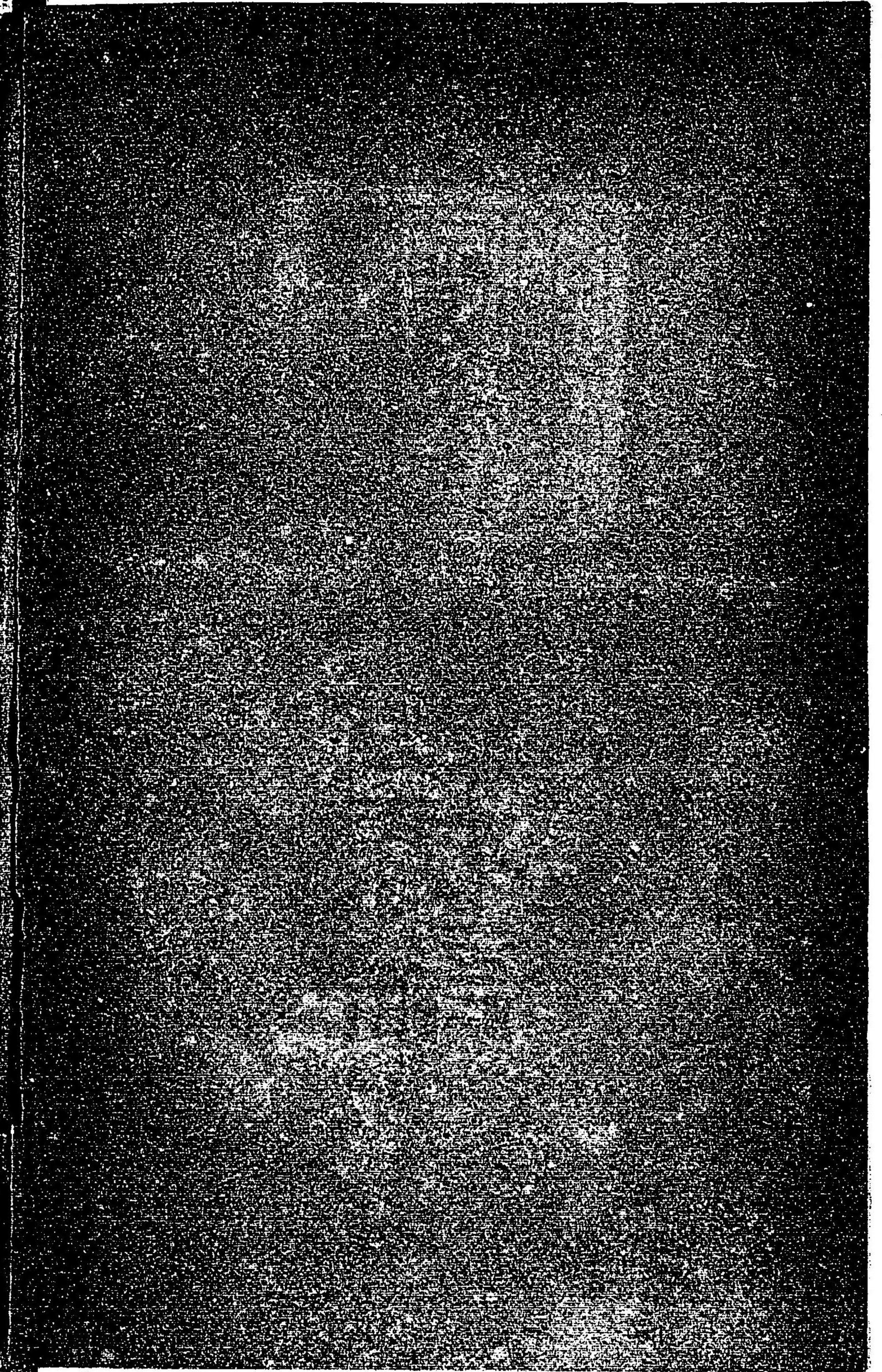
No. 667/XXIV

19-210

基督教 嚴證據論

シヨルヂ、ゼー、フツシヤル氏著
三宅 荒 毅 譯

明治二十四年三月刊行



基督教證據論

目録

- | | | |
|-----|------------------------------------|----|
| 第一章 | 本論の主意及び證據の性質 | 一 |
| 第二章 | 奇跡とは何ぞや附奇跡の出來得べきこと
及び其證し得べき事 | 八 |
| 第三章 | 奇跡に反する自然の感覺を如何にして除
くべきや | 一九 |
| 第四章 | 是認されたる基督教の事實 | 二七 |
| 第五章 | 福音書の中に現はれたる耶穌の品格より
基督教超理的の起原を證す | 三一 |
| 第六章 | 福音物語の特質より奇跡を證す | 三六 |
| 第七章 | 使徒パウロの告ぐる所より耶穌の復活を | |

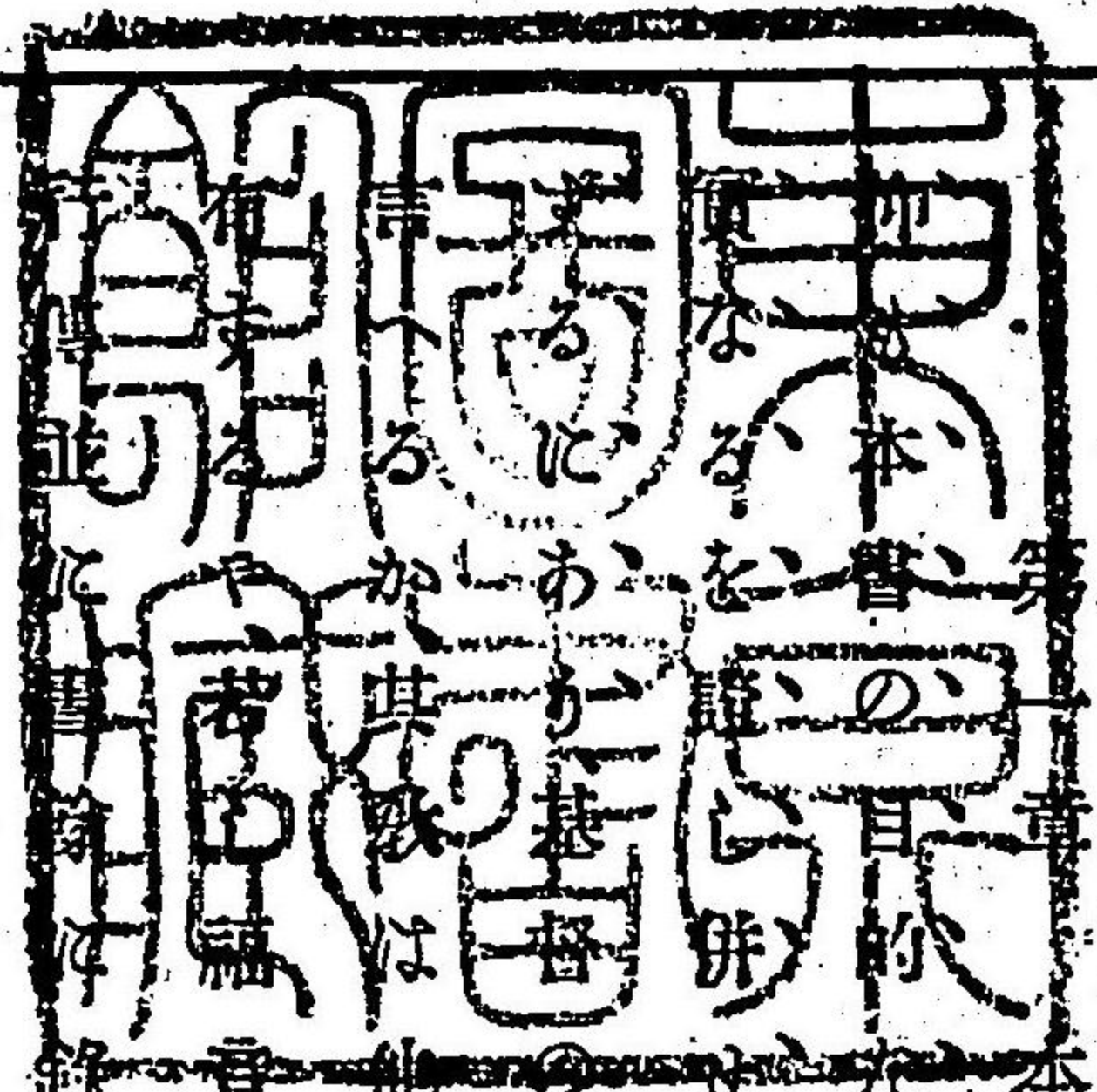
第八章	福音書の著者を論ず	四〇
第九章	使徒等の證據は能く信すべき事	七三
第十章	福音書より耶穌の復活を證す	八五
第十一章	使徒等意見に於て誤謬ある事	九〇
第十二章	基督教と舊約教との關係に於ける異論	九六
第十三章	預言より基督教を證す	九九
第十四章	使徒パウロの改心と傳教より基督教を論ず	一〇三
第十五章	基督教の秀逸優美あるより其の神に起原するを證す	一〇八
第十六章	他の諸宗教及び理學派と比較して基督教を證論す	一二二

第十七章	基督教の世に與ふる裨益より其の眞理たるを證す	一二〇
第十八章	前世期に於ける基督教傳播の迅速あるを以て之を證す	一二三

基督教證據總論

米國　ゼオールヂ、ビー、フエツシヤル著

仙台　三　宅　荒　毅　譯



問題

的證據の目

本書の主意及び證據の性質
るや、一に新約書中に在る基督言行録の確
て基督教は超理的の起原を有するを論
教ゆる所果して神よりか、又己れに由りて
の宗教と異なりて、眞神の默示たる特質を
其の著者編纂書に現はるゝ如き、基督の生涯記及び使徒
傳記に書録する如き、教會設置の歴史にして信ずべき
とせんか、此等の點に確實なる答解を與へざるべからず
本論を研究するに當て先づ其の主意とする所を辨へざるべ

からず、本論の目的たる自然教の眞理を證するにあらず、蓋し眞神の存在と攝理は既に是認されたるものあり、素より基督教は斯る要點に就き世人の疑惑を解き、縱令外界の證據に由らずと雖も眞神の存在を明かにし、人間の自由責任あるとを確かにし、來生の實在を悟らしむ、然れども默示の感化力は擱て問はず、有神論の基礎を置き靈魂不滅の理を明かにするは是れ天然神學の本務なり、又聖書の「イノスピレーション」に關する問題、即ち聖書を録するに當て其の著者たる者聖靈の感應扶助を受けたるや又幾何の度に於て受けたるや否やを論ずるも本論の目的にあらず、又福音史には他の史書に多少現はるゝ如き齟齬缺點等の存するや否やを究むるも本書の眼目にあらず、只論定せんとする處は新約史の眞實なる一點にあり、今此の差別を明かにせん例へばヨヨノン、マシーヤ

著者、眞
實二證の
意義

ルはワシントンの言行録を編したる人なり、素より彼の人ハワシントンを親く識り加之確實なる記録遺書等より材料を集合したり、マシーヤルは穎敏實直の人なりき、故に其の編輯したる所精細なりと謂つべし、或はワシントン自ら原稿を修正し或は全編を口授したりと想像せらるべし、縱令此等の好機會を利用したる有無に關らず、著者にして實録を編するに適當したるや、論を待たざるなり
基督教證據論中新約書の著者と眞實の二證あり、著者の證とは新約書中毎卷其の卷首に示せる著者の記録したることを證するにあり、縱令ば約翰傳は使徒ヨハネの書せるありと云ふが如し、又著者を誤まり或は之を定むると能はざるも其記録の眞實にして信ずるを得るとあり、彼のヂリチス、シーザルの註釋は、自ら著述せるものにあらずして、其同役中穎敏なる一

歴史的の證

將官の作とするも或は他人の編輯に出づるものとするも尙ほ確實信すべきものとするが如し、新約史に於けるも亦然り、各書の著者を究むると要用なりと雖ども、其の起原傳來を研むるは尙ほ一層必要なりと謂ふべきなり

福音史の眞實なるを證するは吾人が他の史書に於けるが如し、先づ一事を信ずるに當ては、同時の史家或は證明者に質し、以て事の果して信すべきや否やを定むべし、傳説の如き事の起りし時日の遠きと近きにより、又他の情誼により、多、少の價值あり、又世に有名なる變動たるや社會に影響を及ぼす千種万狀、而して其の結果たるや、既往事變の紀念碑と稱すべし、彼の今日合衆共和國の存在すると、其制度の性質とを以て、過ぎし米國獨立戰爭の事實なるを證するが如し

基督教の諸證據は他の歴史的の證と等しく、蓋然にして、證明

蓋然の理

的にあらず、證明的の證に於ては、一旦一事を断定せば其の反對を虚偽とし且つ觀念すべからず、蓋然即ち道義的の證に於ては、然らず、又蓋然の理に程度あり、甲は少し理あり、乙は甚だ理あり、丙は非常に理あり、と云が如し、然れども蓋然的の證にして疑心の全く存せざるとあり、我等嘗てロンドンを見たるとなし然れども其の存在せるとを疑はざるは三角形の三角の加は二直角に等しきを疑はざるが如し、ナポレオン一世を我等見たるとなし、而して彼れの世に在りしや、二並行線は、無窮に延長するも、相會するとなし、と云ふか如く、信じて疑はざるなり

積累的の證

基督教の證は積累的にして、識者論者の往々看過する所なり、凡て要點綱目に關するの證據は一つの結論を指す數多の箇條より成立するものにして、此の點に就き二個の過失を免か

内證、外
證の別

れざるべからず、一は證明的にあらざる證據に對して數學的の證明を求むると、二には一證中に含む所の各箇條を分裂孤立せしむるとなり、一本の棒折れたるを以て、全束軟弱なりと、概論するは、古き誤謬と云はざるべからず

基督教の證を別つて内證外證の二となす、外證とは只に福音に現はるゝ所の事實に於ける證據なり、内證は凡て教理の組織を究め其の眞理と神に起原する事に於て吾人の信仰を振起するに適する處を尋ねるにありモズリー曰く「基督教は人性に基き本來其の希望要求する處に適合して満足を與ふるものなり、神を慕ひ、祈禱を爲し、良心あり、罪惡を感じ、未來を望むの心は天賦にして基督教は此等の情と望に應じて供給符合するものなり、此の如くにして先づ吾人に信仰を促し、同時に基督教は外證上の一問題となり、吾人の研究を要するなり

感情は證
明の原

斯く基督教の本質と人間天賦の本性と相符合せるところそ其の教の證據中緊要なるものにして、之れ無くんば歴史的の證は甚た不完全なりと謂つべしと

基督教の證據を究むるに當て、誠實公平の精神を要するは論を待たず又感情の有様に由て判斷に大關係あるは万事に於て然り、彼の美術に關し圖畫の眞偽、音曲の優劣を判斷するに當て此等に関する天稟或は修得の趣味を有せずんば以て適當の評を下すと能はず、教理言行の如き道德的の分子を含む問題に於ても、亦同じ、其の判定を下す人物の心情品格に因るや明かなり、若し吾人に徳性を稱美貴重するの感情なくば、如何に非凡の善人を見ると雖ども、其人の高尙優美なる心情品格を十分に量り識ると能はず、又其美德吾人に感動を越さしむると、少なき、俚諺に「自ら子を育て、始て親の愛を識る」と、宜

なる哉、故に人若し徳義的の證據に接する時は、即ち己れの性質如何を試みらるゝ者と知るべし

第二章 奇跡とは何ぞや并奇跡の出来得べきと及び

其證し得べき事

新約史の信ずべく又眞とすべき事に反對する普通の異論は即ち奇跡の存するにあり、故に先づ此異論の輕重を究め進んで基督教證據中奇跡の功用を論ぜんとす

奇跡の定

奇跡とは外界に顯はるゝ事變にして、天然力も人力も自ら之れを生ずる能はず、故に超理的の原因に由らざるべからざるもの也。パスカル曰く「奇跡は方便として用ひられたる者に存する天然力に超過せる事變なり」と、果して斯る性質を有する事變にして之が原因は人類の右に出づる被造者たることを想像する能はざる状態に於て起らば、其の原因は即ち眞神なり

新約書中
奇跡を表
す字義

りと云はざるべからず、又奇跡たるものは人の領知し得べきものなり、凡て宇宙の万物万事には天然不變の法則あり、即ち同一の原因は必ず同一の結果を生ず、故に華氏三十二度に於て水は變じて固形態となり、尙ほ暖かなれば流動態と化す、又空氣より輕少なるものは飛揚し、重大なる者は墮落するを知る、故に此等因果の法則の外に出てたるものある時は即ち稱して奇跡と云ふ、然れども奇跡と稱する以上は其の事變たる必ずや、宗教に關し或は創宗者の神より遣はされたるを證するが爲に起りたる者たらざるべからず、新約書中奇跡を表する言辭三つあり、曰く(一)「奇異」蓋し其の人心を驚愕せしむるを指す、(二)「能力」蓋し奇跡の歸する神の大能を指す、(三)「休徵」蓋し神の現在を表し又教ゆる者及び其の教ゆる所を確證する者あり

或人は奇跡の成否を疑ひ、又或る論者は縱令奇跡は出來得べしと雖とも決して證し得べからずとせり、今左に之を論ぜん
 第一、人或は曰く「天然法に因らざる事變は即ち原因なき事變と謂つべし」と、抑も天然法とは何ぞや、他なし天然力動作の法なり、法則とは宇宙現象の一定したる連續を云ふ、奇跡の起る時は新たなる原因即ち造物者の特別なる關涉入り來る時にして、天然法を敗りたるに非ず、何となれば奇跡は天然界に於て同原因により同状態に圍繞せらるゝ時はいつも同結果を生ずるの自明眞理に反せざればなり、只奇跡に關し結果の他に異なる理由は其原因の異なるにあり、若し新たなる原因の存するありて、尙ほ前と同じき結果を望むは、道理に反せりと云ふべし、今試みに万有界を觀察するに、優力は劣力の動作を制御して、他に起らざる新たなる結果を生ずるとあり、無機界

は生物力の制する處とある、例へば引力の如し、彼の一粒の種より草木の幹莖引力の法に反して上に向つて生長するを見るは、蓋し此の力彼の力に優れるに因る、故に若し有機物の本性を知らざれば、植物の生長する如き運動の成否を疑ふに至るや、知るべからざる也
 奇跡の成否に就き人意を以て比喻とすべし、抑も意志なるものは物質力に比して特優なる力を有す、故に物質力に對しては理外と謂つべし、人の意力は天然界に於て運動の原因となるものにして、意の動作に因らざれば生出し能はざる千種万狀の結果を生ず、小兒の球を飛揚する、人意力の引力に勝つによる、麩龜の脹發する、人意に助けられずば、自然力の能く爲し得る所にあらず、斯の如く人意力よりして、藝と稱する者を生ず、一指の微動より、巧妙錯繆せる構造に至る迄、茅屋の建設よ

り、「ゴシック」跡の大寺院を築造するに至る迄、小學校の取扱ひより、國家の支配に至る迄、凡て人意より生ずる結果の發表する處には、只だ天然法の及ばざる現像を見るを得るなり、神意の關涉せる所に奇跡の生ずる、決して反理アンライ、ナチュラにあらざして超理スーパー、ナチュラなり

第二反對
辨論及び答

第二、反對者又曰「天然不變なるとは縱令人意の作動の加はる時も眞理なるは疑ふべからず」と、此論の謬點は、天律不變を以て必然眞理にして、數學の原理と等しくするにあり、深識なる理學者にして、斯る確言を爲す者なし、吾人が萬物の運動一様なるを信ずるは、觀察と經驗とに基き、此の發表を信ずるに外からず、小兒が今指を火にて焼かれたりとせよ、彼れ必ず知らん、再び指を火に投ずれば、同様の結果の生ずるとを、宇宙に秩序あり、旨趣あり、吾れを欺かず、天律不變の信仰は以て事の此

第三反對
辨論及び答

の法外に出づる無きを思はしむ、然りと雖ども若し善き理由の存するあらば、宇宙の主宰之れを制御變更するとあるべし、第三、或は曰はん「奇跡は神が自ら定めたる天然法に自反するものなり」と、縱令論者の云ふ如しとするも、天然法は道德法にあらざ、故に此の法に故障するも、敢て道德上惡と云ふべからず、殊に天然神學の教ゆる如く天然法の存するや其の者の爲めにあらざ、物質界の目的は自他にあり、法とは、通常事物の由來する順序方法を指さすの名なり、事理外に出で、却て善を生ずるとせば、敢て神の之れを爲す、道德上より異論する所なし、若し此の反對論に取るべき處ありとせんか、奇跡は只道德上不可能なるを證するのみ、然りと雖ども、世界に於て物理法の調配と共に、道德法の支配ありと信ずるに於ては、反對論者の言ふ所取るに足らざるあり、万有は只自存にあらざ、只造化

全組織の一部たりと知るべし、万有を制定維持するの動機は、又之に故障するを要するとあるべし、

第四反對
辨論及び答

第四「奇跡は證據を以て證明する能わず」と論ずるヒュームは、サ
ッス氏の説教中既に答辨する處となれり、ヒューム曰「吾人か天
理の整一なるを信ずるは、經驗に由れり、證據を信ずるも亦同
じ、然して天理整一の經驗には、例外なし然れども人間の證據
には度々誤謬あるは吾人の經驗する所なり、故に彼れ斷言し
て曰く「如何程の證據ありと雖ども、奇跡を證する能はず」と、ヒ
ュームの論議中數多の誤謬虚偽を含有す、吾人の證據を信ず
る、素より經驗の結果なりと思惟せらるゝも、決して經驗より
生出したるにあらず、天理整一の信仰に於けるも、亦然り、全く
之に原因するにあらざるなり、ヒュームの理論によれば、万有の
序次變遷なきを望むの理由を知る能はず、何が故に既往は、現

ヒューム
の虚偽

ヒューム
の議論を評す

在觀察する處と異ならざりしや、又將來も現在と同一なるべ
きや、素より天理整一に賛し、奇跡を否とする、思想の存するは
吾人の是認する所なり、既に奇跡の字義は斯る事變より生ず
る驚愕を指さざる者にして、豫期に反することを示す、然りと雖
も、ヒュームが「奇跡の起る事に反する經驗は不變一樣なり」と云
ふに至つては、大に誤れりと謂ふべし、ジョン、スチュワルト、ミルの
云へる如く、天理一樣の證は、或る奇跡の起りたる、證據の經重
に從て、減少するなり、ヒュームは奇跡を、凡ての物跡より分離し
て孤立せる事變と鑑定せり、彼れの大に誤まれる處は無神論
の地位に在つて此の問題を論ずるにあり、奇跡を行ふに適し
たる原因の存在を知らず、故に又其行はるゝ所以の理存する
も受けざるなり、天然神學に於て、已に其存在と、屬性を證明せ
られたる、義なる神は、能く自然法の外に出づる事を爲し得べ

しども、例へば心の闇を照らし、罪より救ふの道を證せんが爲め、生れながらなる盲目を愈したりとせば、ヒュームの論や益々拙なり、ヒュームの説を以て考ふれば、ミルの説明せる如く、無神論者又神は奇跡を行ふを欲せざるを證し得べしと自稱する自然神教徒に對して、奇跡を證明する能はざるや明かなり、ミル又曰「天然教は天啓教の基礎、基督教の證據は眞神の存在と徳性を豫定し、其の宗教此の徳性と相調和踰依するを以て外證の信すべきを定むべし」と、

ホックス
リーの説

ホックスリー氏ヒュームを評し、奇跡は万有法を取るものなりと云へるヒュームの奇跡の定義に反對して曰く「如何とされば万有に秩序あるを知るに至りしは、事變の觀察より生じたるにして、奇跡も亦其の一部なればなり」と、氏は此の如き事變は證據に由て證明するを得べしとせり、然れども其の論ずる所に

よれば、氏は斯かる事變は全く万有法に因り生じたりと思考せるが如し、然れども、此の説明や、不條理たるを免れず、若し人死せりとし、其の人他人の命令によりて蘇生せりとせば、此結果は天然の理法に原因すると云ふを得ず、一步を譲りて縱令尋常の原因に由ると爲すも、人類に超絶したる天然作動力を知るの知識を、其命令したる人に賦與せざるべからず、是れ即ち奇跡なりとす、事變と人の命令との符合は、其奇事に旨趣あるを證し、之れを奇跡となす、若し其人にして、天よりの教を告ぐると宣言せば、奇跡と神告の符合は、神其の宣言を證明確實ならしむる、旨趣たるを、證するあり

第五の
問及び答

第五、天理に超絶するの結果は、何を以て非凡なる、愚者の所爲にあらざるを知るべきや、の問或は起こるとあり、茲に造化力の働を含むの奇跡あり然るに此を被造者に歸するの無理な

るや明なり、然れども別に徳義上の證ありて、奇跡は只神より出で、惡の働にあらざるを示す、是れ即ち福音書に基督が惡氣の扶けによりて、奇跡を行ひしと、「パリサイ」人の云ひしに答へ玉ひし處なり

天啓教の證據論に於て奇跡の功用及び地位の如何、抑も默示の万有界、或の尋常の攝理に於る神の顯現と、大に異なり、其の本來奇跡にして、實に神の直接なる顯現なり、此神の現在と其直接なる働きある事實の宗教の教理に關係して奇跡異能によりて五感に現れる、此等の奇跡の教理上及び道德上に原づく證據を確かにするものなり、又奇跡の大に信仰を扶く、其の効用たる、道德上の證據に由り自ら欺かれたるにあらざると信じ、神實に人の陪介によりて垂訓し玉へるを疑はざる人々の、確信を促す、此れ新約史に於て基督の奇跡を行ひたる理由なり

り、心に用意なく、信仰なき處に、奇跡を行ひ玉ひざりし、主の道德上の證據を最も重む玉へりと雖ども、奇跡を以て自ら神より遣はされ罪を赦すの權威あることを證明し玉へり、斯の如く教理の奇跡を證し、奇跡の教理を證すると明かなり、二者相表裏共援する者の如し、何れも神の顯現の一部にして、互に分離するを得ざるなり

第三 奇跡に反する自然の感覺を如何にして除くべきや

預想との、即ち一問題に關して、或は此を信じ、或は此を拒む、豫向に由て之が眞偽を預め心に定むるを云ふ、道理に原づき、證據上よりの預信により、一問題の鑑定に於て、賛成或は反對の預定を爲すとあり、素より證據の本質によりて其の強弱に異同あり、若し吝嗇家と聞ゆる者、非常の矜恤を貧民に施せり、慈

善家と稱せらるゝ者、困難に陥りたる良民を顧ずとの風説を聞かば、茲に其評判を詐偽とする預想あり、奇跡の實際爲されたりと云へる事の眞理に反する預想の生ずる理由、万有法整一の事實なると、斯る整理の裨益瞭然たるに在り、此の信仰によりて吾等歴史家の記載する所、平常一般の事跡ならば、信ずるに躊躇せざるも、奇跡の記事に至りては、信ずることを欲せず、敢て質問するとも無く、之に頓着せずして、自ら満足するとあり、彼のタントスがヘスパシアンの戦争を記するに當て我等之を信ず、然れども彼大王が盲人を醫せる話を告ぐるに當ては、其の話を嘲笑し、甚だしきに至りては斯る詐偽の何れに生じたるを想像せんと試むるとあり、奇跡に反する斯る豫想を除かんが爲め、我等先づ天啓の必要を議り、併せて基督教義の眞正優美なるを玩味せざるべからず、然して後新約史に

記する奇跡の事實たる證據を研究するの道明かならん、
パーレー氏曰く余は人類の天啓を要するを證明する必要を見ず、如何となれば余未だ一人も基督教の天啓に照されてすら、吾は多分の光を有し過分の信仰を持すると、思慮する者あるを知らざるなりと、天啓の與へらるゝは、人間の之を要すると、神の慈善なるとに、原づくなり
人間に益ある者宗教より大なるはなし、是れ吾人の義務と、命數に大關係を有すればなり、此の問題に關して、焦思苦慮の四大因存するあり、第一は只天然界のみに於ては、神を識ると、漠然として、慥かならざるとなり、人々現在の有様と、品格に於て、實際又發見する處如何、素より全く無智なるにあらざ、無智に満足するにもあらざと雖ども、亦心に安きを與へ、徳行を勵ます程の動機を賦する、明瞭確實なる知識あるにあらざ、人の神

罪と罰の
感覺

罪惡の奴
隷

を求むる恰も暗處に物を探索するが如し、其の物牀に就き幾分か知ると雖とも、之れを見出すと能はず、思ふに人類は賤愚の迷信と、暗黒なる不信の兩間に動搖するなり、靈魂不滅の問題の如きに至つても、亦確かならず、望と疑の混ざる所となる是れ即ちソクラテイスの如き賢人智者の地位なり

第二は己れの價值なきを感ずるところにして、是れ數々心を痛むるの重負となれり、即ち罰を恐るゝの念や、万國の諸宗教に行はるゝ犠牲に於て自ら現はる、是れ吾人の依頼する、大能者と和らざるの感覺あるを示し、彼れに對して多少皆を義務責任のあるを感ずる、良心の證と謂つべし

第三は己れの心に存する惡の支配により、不満足^の念、且つ罪惡に克つ^の力なきを感ずるとなり、從來の習慣に羈束せられ此の惡弊と争ふとも常に無効に屬し、從て神の祐助を仰ぐに

苦痛悲歎
の重荷

至らしむ、詩家ホーレス此の奴隷たるの意を表して曰、吾善を見て之れを賞するも、吾れ惡を爲すと、バイロンも亦云へるあり、此の消滅す能はざる罪の染汚、此の限界なきユーパス樹、此の大害を與ふる喬木と

第四斯く靈魂上需求する所あるに加へて、吾等生涯の苦痛困難に際し、天然^の敵の賦する能はざる能力の原因を慕ふの感覺あり、困難にも慰を得、悲嘆に平和を得、失望に拯救あるを欲するは、深く心庭に感ずる處なり、今此の如く人間に關する大事實を縷々説明すると能はずと雖ども、苟くも己れの良心に問ひ、眼を啓きて世界の有様を見、歴史を觀察せば、誰れか此等の眞理によりて感動せざるを得べけんや

人間の要する所大にして、到底自己の能力のみに由りて、補充する能はざるは、經驗上より明なるが如く、又一方に於ては、万

基督教は
前後の要
求に照す

有界に神の慈善を表明するを見る、此れ天然神學の教示する所に於て、ブルタークの如き、異教徒も神は惡を罰するに遲きを述べ、價値なき人類を救ふの矜恤あるを論じたり

基督教が以上簡單に記載したる、人心の要求を満足するを得るは、以て其神より出づるの一大證なり、是れ即ち福音の眞理たる内證の要點にして、神の默示たるを明かにす、然れども今茲に奇跡の起る理あるや、否や、を考ふるに當り、先づ世人皆な是認せざるべからざる、基督教義の要目に注意を請はんとす

(第一)基督教は天然教の要理を明瞭確實にす、神の存在、攝理、人間の責任、來世等に至る迄、其教ゆる所、人々を感動せしめ、多くは此等の眞理に勸導せられて、異教の迷惑を去り、不信疑念を棄つるに至りたる者、多し

(第二)基督教は前に記載せる人心の罪惡を秘藏減少するとな

基督教の
倫理

し、反て人間の罪、及び凡て苦痛を與ふる者、且つ死に關するを明かに述べ、此の心の病の重大なるを公にし、此れと戦ふべきを教ゆ

(第三)基督教は己に詳録したる要求に應ず、即ち神に關する吾人の知識の漠然たると良心の責め、心にある惡の習との戦ひ、悲嘆困難の重負より安きを得ん爲め、新たなる動機と外部より來る心靈上の祐助の必要等、凡て此等の需求を満足せしむ

基督教は常に人をして神を知り、神と偕ならしめんと、企つるのみならず、實際之れを成就せるは歴史に照して明なり、即ち非常の困難に忍ぶの力を與へ、死に臨んで平和と望の光を與へたり

基督教道德の教は良心の教ふる所と相符合す、人間互の交際上に於ける、此の教義は、眞實、清淨、親切の三つに含めり、言行に

信仰と道徳

於ては、誠實、思慮、舉動に於ては、清潔、慈善、愛憐、此等は皆な福音の大切なる教訓なり。

基督教の歴史は此等の徳行を實施し易からしめ、福音の信と望によりて惡に勝たしむるを證明す、福音の教は、心靈の確信と、經驗となりて、徳義の改良を促がす大道なり、基督教の結果は、靈性、徳性の新創造と云ふも、大言にあらざるなり。

以上論ずる所は基督教に見ゆる奇跡に反する預想をして緩あらしめ、證明の一點に於ては、奇跡を以て尋常の事實と同平面に置かしむ、若し奇跡を取り去る時は、神人直接の交通たる基督教の特性を失ひ、其眞理たる證據の要點を損するなり、今基督教を判斷するに當て、パトリックの言を記すべし曰く決着すべき所は此の宗教か、然らざれば無宗教か、二者の一にあり、若し基督教信ずると能はずとせんか、吾人知る他の宗教の口

實とする所を是認する者なきを、

第四 是認されたる基督教の事實

基督教の起原は基督の言行に發端す

深く本題に論及せざるに先だち、基督教に於て公衆の承認して敢て争はざるの事實を一覽するは、無益の勞に非ざるなり、抑も基督教は、ナザレのイエス、三年間の宣教に、起原せり、之に先だち、パプテマスのヨハ子悔改の道を教へたり、其の説教、及び結果は、ユダヤの歴史家、シモソフスも記載する處なり、耶穌は僅少の弟子を撰擇教訓したりしが、彼等も亦下賤の民なりき、其のパレスチーンを歴遊し、教を傳ふると、三年ユダヤ國議員の爲め罪に定められ、羅馬よりユダヤに派遣せられたる代理者ポンテオ、ピラトの下に、死罪に處せられたり、基督の生長し玉へる、ユダヤ國の教は、一神教にして、教主の支配を受くる一般の神國を望める者なりしが、基督は自ら此の教主たることを

ユダヤの宗教

公言し、爲めに死刑に處せられたるなり彼れの教理言行は、非常の感動を與へ、其の死後、直ちに弟子等は主の復活して、彼等に顯はし玉ひしとを、證し之れが爲めに、困難苦痛を忍び、基督の證人と爲りて、殘酷の死に逢へる者もありき

基督の昇天後、數年を経ざるに此の教を信ずる者を非常に迫害せんと奔走せる、タルソンのソウロ、全く改心して、基督教無二の熱心ある説教者となれり、之が爲め、ユダヤ人及び異邦人より來る迫害に關せず、學者貴顯士人の助力を要せずして、此の新らたある宗教は、速かに羅馬全國に傳播せり、ローマの歴史家タシトスの云へるあり、チロ帝の代に於て、虐王の爲めに苦められ、殺されたる、信徒は大なる群集をなせりと、是れ紀元六十四年のとなりき、トロヤン帝の時、ポットスビシニアを領せる、プジョニーニ一紀元百十一年の頃、帝に報じて曰く、此地方の基督

パウロの
改心は
基督の
傳播の
教の

信者は、増加して異教の宮殿は、殆んど荒廢し、犠牲に供する動物は、全く市場に無き程なりと、實に福音は迫害の甚だしきに關せず、諸王の滅亡を試むるにも係らず、益々傳播し、終にコンスタンチン大王も自ら改宗し、紀元三百十三年に於ては宗教自由を公布せり、希臘羅馬の異教は茲に悉く消亡し、後ローマを顛覆したる蠻民も基督教を奉じたり、此の教や實に世に強大國と稱する民の奉ずる宗教にして、其の彼等を教化して開明に導きしや明瞭なり、現今世界人口の三分の一は、此の教を奉ずる者なり

基督信者は初代より集會の如き者を組織して、一致結合せり、即ち教會なるもの生じ、政治禮拜式等をも制定して今日迄傳はれり、パプアスマと晚餐の禮式の如き、又安息日を清く守ることは、使徒等の時より始まり、今に至る、又無數の神學、禮拜、應

用上の書籍は、世々信徒中學者の著述する所となれり
基督教の感化は只に外形にあらざして、一個人に於ても、亦一
社會に於ても、改良一變するの力あり、又美術、文學、法學、及び人
情言行に至る迄、感化を蒙らざるはなし、基督教の名義を以て
世に流したる害は、宗教の罪にあらざして、之れを濫用、腐敗し
たるに原因するは、公衆の承認する所なり、基督教の感化力は、
實に人の品格を高尙にし、文明を鞏固ならしむるや明かにし
て殆ど之を疑ふ者なきなり

以上の略記は、以て基督教の万国史に於ける、現象の如何に大
なるやを、知るに足る、吾人の今研究せんとする問題は、即ち新
約史は其の起原に付き正史を與ふる者なるやを、質すにあり、
是れ實に必要な問題なりとす、ホプキン氏曰く人間なるも
のは容易く欺かるゝと云ひ、基督教の起原を度外視するは、恰

かも水は容易に何れの方角にも運動する者なりと稱して、潮
流の起原を研究せざるに同じと宜なる哉、

第五、四福音中に現はれたる基督の品格より基督教
超理的の起原を證す

福音書に書き出したる基督の品格は、高雅優美無双にして、實
に消極的の徳、即ち悪性の不在なるのみならず、積極的の確乎
たる性より成立するとは、公衆の承諾する處なり、其の品格は
敬神、即ち神を愛し、其の聖旨を爲すに實なると、愛憐、即ち己
れを顧みずして人を愛し、彼等の不正、妄思も此れに勝つと能
はざるの美德を完備し、聖徒と愛憐者の品性を調和せり、且聖
清、慈愛、柔和を兼備し、惡に一步も譲るとなく、友と雖も、弟子と
雖も、些少の悪事あれば黙許するとなし、然れども、又矜恤を以
て赦罪の精神に富み、活動的の徳を以て、高貴を憚らず、真理に

基督の品
格は人造
にあらざ
ると

據りて立ち、承、受的、的、の、徳、を、以、て、堪、忍、柔、和、の、徳、を、有、て、り、實、に、基
督、に、於、て、世、皆、な、善、の、理、想、を、見、る、を、得、べ、し
抑も此の品格は、福音記者の想像に出でざるや其證多し、是れ
實在の人物にして、記者の敢て發明し能はざる者なり、(第一)此
人物や之を畫きたる人々の不完全なると全く異なり、香璣の
懸隔あるを見る、實際に現れたる、斯かる模範あるにあらざれ
ば、争でかガリヤの漁夫が、万国歴史の中心たる、此人物を寫
すを得んや、(第二)此の人物は前代未だ曾て摸寫したるとな
き者にして、之を寫すに形容詞を以て、或は無形的の説明、曖昧
なる筆を以てせざるなり、吾人基督の人となりを見て感ずる
所は、福音に記する夥多の事實と教訓より生ずる者にして、彼
れを知るは、即ち諸の事實の結果とも云ふべし、若し此人物は
只記者の想像に出でたりとせば、斯る結果を生ずると能はざ

基督の完
全無缺な
ると

るや、明かなり、(終りに)福音に書かれたる基督の品格は、儘かに
實跡たるの風格あるを見るなり
一步を進んで福音書に據るに基督は全く罪なき人物たりし
なり、吾人は彼れに於て無瑕、純粹の性質を見る、是れ素より理
を以て證明する能はざるの點にして、誰か他人の言行を見て、
其動機を識別するを得べけんや、然りと雖ども、容易に此の
疑惑を解くことを能くすべし、抑も基督に關して記載したる事
に就き、道徳上の過失ある證なく、又基督の爲せし所、言ひし所
に於て、一も非難する所なし、福音記者が縱令彼れを實際より
遙か勝れる者となさんと企てたりと、想像するも、其の目的を
成就する爲に多くの材料中より取捨選擇して過たざりしと
云ふに至つては信ずる能はざるなり、此働きは彼等の能力の
及ばざる所にして、若し其説の如くせば、是れ胸裡に完全の摸

基督の完全なる事

範を有し、且之れを記録牀に寫出するの妙を得たりとすべくして、決して出來得べきとにあらざるなり、加之ならず、イエスは凡ての摸範に優りて清く、惡念、惡情を識別するに鋭く、心の念と意志を鑒察して、尤も小なる惡も、之れを譴責して憚らざるも、自ら己れを非難するの形跡あるなし、若し或はイエスの祈禱中に自ら過失に陥りたるの意を含めば自ら心に責められたるに就き記録に存じ口説に傳へられしならん其の事業は挫折せられ、恐ろしき死前に在る時に際し、苦痛の間に必ずや、懺悔を含むの言を發せしならん、然れども實に自ら斯る感なきのみならず、親密なる弟子等に、主は全く徳義上の誤謬より自由なるの感覺を與へたると疑ふと能はざるなり

基督の完全無缺を信する者は、茲に基督教超理的の起原を證する大論の存するを見るなり、(第一)に基督を除くの外、人類中

他に完全無缺なるもの存在せしとするの理由なし、彼れは人類普通の例外に出づるものにして此品格を説明せんには宜しく基督は神と非常の關係を有せりと、確定せざるべからず、(第二)基督の罪なきは以て其己れに關する自らの證據を信用すべからしむ、彼れ神の子にして救主なりと稱せしとは争ふべからざるにして、之れが爲め十字架に磔られたり、己れの地位を保守して譲らざりしは、又例外無比のといふべし、自ら人類の救主、心の案内者と稱せしも亦疑ひ無きなり、彼れは驕傲なり、自ら欺けるなり、との疑を除かんとせば、己れに關する基督の證據と、判斷とを、信せざる可からず、若し吾等之れを信ぜずば、完全なる徳義、清潔と謙遜は、實に世に比なき、自尊自慢と並立する者と、決斷せざるべからず、吾等、此の獨一無双の完全清美なるを見て、彼れにある光は、即ち暗きと決斷せざる

べからざるなり

第六 福音物語の特質より奇跡を證す

福音書は基督の言行に關し、多分の實事を記載する事を疑ふ者なし、世人基督の事業と、教訓を知らんとするもの、皆此の書に據る、奇跡を信ぜざる、ストロイス、レナンの如き、著述家も、基督の生涯記を編成するに際し、其の材料を皆な福音書より得たるなり

今此の四書の年代、及び著者を研究するに先だち、吾人は書中識者の歴史上、眞實と是認する部分に於て、基督の行ひ玉ひし奇跡の確實なる證據あるを見るなり

(第一)基督は病人を癒せし時、之れを人々に告ぐる勿れと、命ぜしと、數々あり、(馬太九、卅七、十九、馬加三、一、二、五、四、十三、路加五、十四、八、五十六)彼れ公衆の騒ぎ立つとを願はざりし、蓋し道徳上及び心靈上の感情に乏しき徒

奇跡を人々に告ぐる勿れと命ぜし

奇跡を重んじ過ぎるとなきと

なればなり、或る時は人を避けて曠野に退き玉ひしことあり、此の奇跡を人々に報ずべからずと、命じたるは、基督の口より出でたることを疑ふ者なし、人々此れを造り出したりとする、理由あるを見ず、殊に其の命令に従はざりしと録されればなり

(第二)奇跡を法外に尊重すべからずと、基督は明らかに誡め玉へり、(馬太四、四十八、四十九、十、七)若し奇跡は、人意より出でたる、妄想なりとせば、斯く奇跡を蔑視する如きとあらざるべきあり、想像に富み、奇を好むの氣風、奇説を編成する、以上は、必ず其の要用を擴張すべきなり、彼の使徒等、悪鬼を退出すを得て大に喜びしが、基督答て、悪鬼の爾に従ふを以て喜ぶとす勿れ、寧ろ天國を望むを以て喜びとせよと、云ひ玉へり(路十、二十)

(第三)確かに基督の言と稱するものにして、奇跡と共に記載し、

教訓と奇跡と相連

決じて分離すべからざるものあり、彼の「パプアスマ」のヨハチ、牢獄にある時、二人の弟子を遣はし、果して基督は救主なるや、將た他に待つべきやと、基督に問はしめたるにあり、是れ惟ふにヨハチの心中、一時の疑念を生じたるにして、或は基督の非常の能力も顯はれず、神の國も明かに民間に來らざるの事實に原づき、或は鐵窓の幽鬱の時に際して疑の起りしならん、素より基督の證人として、尤とも効力ある、ヨハチの心中に斯る疑念の生ずる、弟子等の敢て願はざりし所なり、誰か偽つて之れをヨハチに歸することを欲せんや、而して此の記録ある又以て福音史の事實なるを證すべし、彼の使者等は、ヨハチに歸り自ら見聞せし所を告ぐべしと令せられたり、即ち盲者は見、跛者は歩み、癩病は清まり、聾は聞き、死せる者蘇へされ、貧き者に福音を宜べ傳へらると、此の基督の答は事變中の一部にして、

是れ基督は茲に記載せる奇跡を實に行ひ玉ひしとを證すべし、基督は偽善なる「パリサイ」人と、議論中に、或る時此の如き問を設け玉ひしとあり、汝等の内、安息日に於て、驢馬或は牛、坑に陥らんに、誰か直ちに走り行きて、之れを救ひ出さざる者あらんや、(路十四五)と是れ基督特有の文牒にして、主此の言を吐き玉ひしを疑ふ者、殆んど無し、今路加傳を見るに、基督の此の問を設け玉ひしは、一手凋たる者を愈やせしにより、「パリサイ」の責むる所となりたるによる、主の言葉を見れば生命危険なる人を救ひしと明かなり、然れば使徒等の記録せる如く、基督は實に安息日に於て、病める人を愈やせしことを争で疑ふとを得んや、此の外尙ほ類似したる事柄多くあり、福音を研究する人々は見らるゝならん、基督の教訓は、奇跡に關する主の言葉と、共に記載せられたる奇跡を豫定する者なるを

基督一
福音書
前に奇
跡なきと

「メテ
スマ」の
ヨハネに
奇跡を附
與せず

基督の「メテスマ」を受くる前に當て、奇跡を行ひ玉ひしことを録せず、是れ又福音書の正史なるを証するなり、若し福音書に
ある奇跡録は眞ならずして想像に出でたるものとせば、何故
に早くよりして此の事あるを言はざりしや、何を以て未だ基
督三十歳に達せざる前に奇跡異能を彼れに附與せざりしや、
又「メテスマ」のヨハネの奇跡を行ひしことを記載せるを見
ず、彼れは基督に就き證人の中尤も大なるものなり、若し奇跡
の事は事實にあらずして、人造説とせば、何を以てヨハネに同
様の奇跡を敢て附與せざるや、是れ疑はざるを得ざる所なり
第七 徒使ポロの告ぐる所よりイエスの復活を證
す
如何なる學者と雖ども、ポロの自筆なるを疑はざる書翰四
つあり、當時有名なる懷疑者等も、敢て其の然るを疑はざるな

り、即ち哥林多前後兩書、羅馬書、及び加拉太書是れなり、哥林多
前書に於て、ポロは基督復活の證據を論ずるを見る、此の要
點に於て、彼れ自ら他の使徒等より學びたる所を吾人に示
せり、加拉太書に於て、ポロ屢々使徒等と交際したる事を述
べ、即ち彼れ改心後三年を経て、エルサレムに行き、ペテロと二
週日を費やし、(一〇。十八)其時主の兄弟ヤコブに面會したり、後(五
十二年頃)ペテロ、ヤコブ、ヨハネに會し、福音の教に關して相議
したることあり、(二〇。一二)と、ポロは他の使徒等の基督復活
に關し、意見の存する所を議るの機會を得たり、哥林多人に書
遣りて、主の死より復活し玉ひしとは既に前に傳へし所なり、
即ち主は聖書に應ひて葬られ、第三日に甦へり、ペテロに現は
れ、後に十二の弟子に現はれ、其後五百人の兄弟の集れる時も
亦此とき現はれ、次にヤコブに現はれ、又凡ての使徒等に現は

れ、最後に改心の時に際して、ポロに現はれ玉へりと證せり、
(哥前五、一—九)縱令福音書の記録存せずと雖ども、此のポロ
の書翰に由りて考ふる時は、使徒等は主の死後第三口より
其の復活を證したるや、明かなり、故に吾等福音史中此の眼目
たる事實に關して、使徒等の證明を見る而して其證は信じて
眞とすべき者なり

ポロ基督
を見たと
る

反對者或は云はん、基督のポロに現はれたるは幻夢にして、
實跡にあらざると、然れどもポロ(第一)自ら耶蘇を見たる時、耶
蘇最初の默示と爾後の顯現とを明かに差別せり、(哥後十二、一、
哥前二、十)彼れ曰最後に(復活したる主の現はれ玉ひし度數を
數へて)吾れにも顯はれ玉へりと、ポロ改心の時に當て、耶蘇
を見たるは、是れ主肉跡を以て現はれ玉ひし、最後にして、默示
上の幻現と、全く差別せり(第二)素より此等後年の幻現は實跡

ならずとする理、存せりと假定するも、彼初めに基督を見たる
とは、此れと同一視すべきにあらず、初め基督のポロに現は
れ玉ひし時に於て、ポロの心は錯亂せるにあらず、主の弟子
等を迫害するは、正道なりと、自信して毫も疑はざりしなり、爾
ち刺ある鞭を蹴るは難しとは、基督教の進歩を妨害せんとす
るは無益の勞なるを云ふの俚諺にして、ポロの内心疑念あ
るを示せるにあらず、彼れ此れを爲すは、神に仕ふるなりと、固
く信せしや必せり

基督のポロに現はれたる其顯現の性質如何は暫く擱き、他
の使徒等に主の現はれたるも同一種と云ふに至ては、大にポ
ロの言を誤解せりと云はざるべからず、福音書を緝かば、復
活したるキリストと、其弟子等と度々面會したるを記録せ
り、是れ古代の教會に傳來したる、舊き傳説なるは、福音の眞實

を研究するに先つて、宜しく確言すべし、而して福音書の記録は使徒等自ら信徒に向て説きたる所を集合したるや疑ふべからず畢竟するに、ポロの哥林多に遺る書は以て書中記載せる主の顯現に關して福音書の證する所を益々確定するなり

使徒等は欺かれたるや、此等の顯現は心の迷ひなりしや、心神錯亂は五管或は腦髓の錯亂によりて神經組織外に實存せざるを見且つ聞かしむ、基督の死後弟子等に現はれたるを斯く説明せんとするは確かに理の許さざる所なり、基督の斯く再び現はれ玉ふとは弟子等の期して待てるにあらざりしや、明なり、弟子等は縦令エルサルムより離散せざるも、悲歎と恐懼に満たされたるや、福音に記する如く、信じて疑ふべきにあらず、是れ自然の勢にして、主と頼む者に死別し、基督に於ける

望は十字架と偕に碎けたれば也、然らば心神説の云ふ如き、幻像を見る心神の準備や極めて無し、故に斯く多くの人々、數々基督と偕にあり、基督を見たりと信じて、毫も疑はざるの事實は、其假説をして、益々信じ難からしむ、福音の眞實を確定せるに至らば、トマスの疑心と、其解けたる如き情實は、全く前の妄説を破るべし、加之あらざり、心神説は、主の顯現に於ける一種の異狀より排斥するを得べし、即ちポロの云へる如く、其の現はれ玉ひ、度數に制限あり、又其時に定限ありしと、是れなり、初め第三日に現はれ、暫時にして終りたり、若し基督の弟子にして精神昏亂し、是れ實に主を再び見たりと思はしめたる原由とせば、宜しく主の現はるゝと、其の度數多く、其の時限定まらざるべきなり、且つ時日を經過し、弟子等の勇氣と、熱心の益々増長するに從ひ、此の現象愈々連續増加すべし、是れ心思錯

亂の常法なればなり、而して何ぞ其の止むの斯く速かなるや、斯く論じ來れば使徒等の世の快樂を顧みず、生命をも惜まざりて、證明する此の事實や、宜しく信ずべきなり。

第八章 福音書の著者を論ず

福音の記者に關する證據たるや、ヨセフスのユダヤ史、リビの羅馬史、其他古今の史書に於けると同一なり、事理に通じたる先哲の確信、疑を容るべからざる古來の傳説又不正の史書を顧みざる文學隆盛時代に於て憚らず福音に引照し或は福音より採萃すると、及び書中明かに著者年代を示す、等是れ福音書の起原を由て以て判決するの證據なり。

此の問題に於ける證據を研究するに當て、先づ第二世期の末年に立つて觀察せん當時羅馬帝國にある全教會に於て、四福音書は、基督の言行に關する確實なる教書たるとは、普く信用

する處なりき、今此を起點とし使徒時代に溯り、研究を加へんとす。

第二世期の末に當て、教會中最も有名にして勢力家たりし一人は紀元百七十七年コリに於てリオンの監督となれる、アイレニオスなり、紀元百八十年の頃當世に起りたる、異説に反對して一書を編せり、書中遇々四福音の事に論及し、其の全教會の接る處なるを述べ、以て別に耳新らしき事實にあらずとせりアイレニオス尙ほ詳らかに論じて曰く馬太はヘブル人の内に在り其の言語にて、福音を著述せりと、ペテロ、パウロの死後に於てペテロの弟子なる馬可、自ら其師の説きたる所を登録して、吾人に公にし、パウロの同伴人、路加も、パウロの教へたる福音を編輯し、最後に主の弟子約翰はアシアのエペソに在る時福音を遺したりと、又曰くヨハネは、高齢に達し、紀元九

十八年トラシヤン帝の即位後に至りて死たしり」と
 アイレニオスの正實なるや素より疑ひなし、只其の既往の智
 識を得たる方法を探究せずんばあらず、彼れはアツヤ、マイノ
 ルに生じ、東方に多くの歳月を費やし、彼の使徒ヨハネの弟子
 にしてスミルナの監督ポリカールと相知れり、其の殺された
 るは紀元百五十五年にしてアイレニオス未だ丁壯の時なり、
 彼れの生れたるは百二十年より百三十年の間におりて只此
 ポリカールと相識るのみならず、他の年老ある基督の徒と相
 識り、リオンの監督たりし、ボシノスも同僚にして、九十歳に至
 りアイレニオス其の相續者となれり、又アイレニオスは、或は
 使徒等より直接に教へられ、或は使徒より教訓を受けたる弟
 子より教へられたる者にして、古代教會を牧する長老等と、評
 議たるとあり

クレメン
ト及びト
ルチニ
ア

斯く四福音は廣く一般に信用せられ、全教會に於て教權を保
 存したる事實は、其他アイレニオスと同時代に生れ、教會中著
 名なる教師等の證する所なり、即ちアレキサンデリヤに於て、
 有名なる神學者、クレメント及び北亞非利加の監督トルチニ
 リアンも此れが證明を爲せり、クレメントは紀元百六十年頃
 に生れ、漫遊して博學多識の聞へあり、四福音を稱して、我等に
 直傳せられたる者なりと云へり、トルチニアン斷言して曰、
 四福音は太初より存在し教會と同伴共存するものなりと、而
 して其の裁決を求むるに當て此れを使徒等自ら組織したる
 諸教會の證明に訴へり
 今アイレニオスより一代を溯りて、シヨスチン、マーナルの證
 あり、彼れは信徒たるの理由を以て紀元百六十六年、マールコス、
 オーレリオスの時死刑に處せられたり、紀元百三十四年より

シヨスチ
ン、マー
ナル

百三十六年に至る迄ユダヤ人暴亂の時に際し既に所々の理學派に就き、黽勉し、基督教に改心したり、第一世の末年に當て、サマリヤの古昔のシケムに近き、フラビア、ニアポリスに生れたり是れ羅馬殖民地の一なりと雖ども其の家族は皆な希臘人なり、暫らくエペソに寄寓し、多くの信徒と交はり、諸教會と親しく接したり、其の著書中今尙ほ存するもの三つあり、即ち講話二冊と(是れ基督教を證し反對論を辨駁する書なり)、トリフォと稱するユダヤ人との對話是れなり、第一の教話は、紀元百四十八年頃、アントニオス、パイオスに對して陳述する所にして、第二も亦之に續く、シヨスチン自ら基督の言行を識るを得たるは、即ち使徒等の日記に因れりと稱せり、素より教會外の不信者に對して書する時は、其の日記の著者を指名するの機なしと雖ども、其使徒等及び同伴の人々の記する所たるを

を明言せるとあり、或はペテロに關する一事を載せ此れペテロ福音書より識る所也と言へり、思ふに此の事たるや馬可傳に見ゆる所にして本書は屢々ペテロ福音書とも名稱せられたるとありシヨスチンは使徒等の日記を稱して福音と云へり此の福音の名義は他の著書等によりて四書を總稱するの名となれり、シヨスチン曰へるあり、此の日記は公然と信用せられ、市邑の別なく、總て基督信者禮拜の時に當て、安息日毎に必ず朗讀せられたりと、抑も此の日記とは何ぞや、アイレニヲスの所謂四福音と同じきや必せり、然らざればアイレニヲス成人の後當時教權ある福音書は新らしき福音の爲めに、壓倒排除せられたりと云はざるを得ず果して此の大變革ありとせば、何ぞアイレニヲスは此れを識ざりしや

シヨスチンは此の日記に引照すると、數多にして其の拔萃

引照拔萃
と福音の
符合

のみを集合するも、基督言行録を編成すべし、其の引照する所悉く四福音書の言語と相符合す、其大部は馬太、路加兩傳に在る所と符合し、其小部は、只馬加福音書のみに見え、又全く約翰傳特有の記事或は章句に能く符合する引照なきに非ず、素より其の拔萃する所一言一句精細なるにあらず、蓋しマテウスの目的に於て此の必用を見ざればなり、然れども福音書中より拔萃する所は舊約より引照する所より一層細密なると明なり、縦令ば約翰傳三章三節より五節に至る迄マテウスの引照するを見るに、意義一にして文面大に異なるを見る、此れ自然にして彼の英國神學者エレンミ、アールの聖語を引照するに於けるも亦然り、マテウが福音史の事變と、教訓に引照する所にして、今福音經典中に其の符合する所なき者は僅々一二に過ぎざる也

マテウスの所謂福音は即ち經典の四福音書たるとの證は、彼の弟子タシアンが、此の四卷を編して、單一なる記事とし、四つの福音と稱せし事實にあり、其の書は約翰傳第一章を以て其の卷首とせり

第二世紀の中頃に至る迄、基督教文學は稀少にして、完全ならず、只多くは信徒の傳を建つる書翰たるに過ぎず、福音書に在る、言語と相符合する者なきにあらずと雖ども本文と混入し或は拔萃の記號もなく、或は只基督教理の一片たる漠然の序言を加ふるのみ、故に斯る章句拔萃は、果して直接に初めの三福音書より引ききたるか又間接に口傳より來りたるものか、之を確知する能はず、然れども使徒相續時代の著者に於て、四福音經典中にある記事の反響、夥しきを見る、例へばポリカールの如きピリピ人に送りたる書中に曰く、實に主が靈は欲すれ

バルナバの書翰

ども、肉躰弱きが故なりと、云ひ給ひし如く、云々「是れ馬太傳六章十三節に相符合するを見れば、恐らくは是れ此福音書より引きたるならん、又曰「蓋は凡そ耶穌基督は肉躰となり、來り玉へることを、認さざるものは、基督に敵するものなり」と、是れ若し自ら其師なるヨハネより聞きたる所を、記憶せるにあらざれば、惜かに約翰第一書四章三四兩節より引きたるなり、約翰傳及び約翰第一書は同一の著者より來ると明かなり、誤つてバルナバの書翰と稱せらるゝ者は、紀元百二十年頃に成れり、其書中を見るに、材料を多く馬太福音書に取れるものゝ如し、殊に書中「彼れの來るは義人を招く爲めにあらず、罪人を悔改めさせん爲めなり、又「我れら謹むべし恐らくは呼ばるゝ者は多く撰まるゝ者少なしとの、聖言我れらを見出さん」とあるを見れば馬太傳二十章十六節及び二十二章十四節と相類似する

十二使徒の教訓

なり
十二使徒の教訓と稱する古き教書は、コンスタンチノーブルの書籍館に於て、發見せられ直に紀元一千八百八十三年始めて出版になりたり、或る學者の説によれば、此書はバルナバの書翰より、古代の者にして、第一世紀の末に屬する者と、縱令バルナバより以前の者ならざるも、決して紀元百四十年以後の者ならざるべし、此の書は、教會の教訓指南の類にして、ユダヤ基督信徒の異質特性を以て充滿せり、書中の言語は以て馬太、路加、兩福音書を引照としたるを示す、即ち或る處に言へるあり、「凡て汝等の祈禱、施濟、善行は、吾が主福音に示し玉へる如くに爲せよ」と、福音の名稱を用ゆると書中三度、而して是れ記錄書を稱するものにして、クリシヤン、及び其他古代の著述家が四福音を總括して、一躰となし、其の全部を稱したる名なり、十二

使徒の教訓に於ても亦同様の意を以て用ひしならん、或は著者の掌中にありし、馬太、路加二福音の調和を示せるなるべし、畢竟する所此の教訓中判然として引照せる書は、教權を以て、教會中一般に受用せられたるや、疑ひなし、此の外尙ほ聖餐の時に用ゆる三條の祈の如き、約翰傳特有言語文句あるを見れば、即ち約翰傳より拔萃せると云ふも敢て理なきにあらざるべし

古代聖書の翻譯

パピアスの証

福音書の起原古へにある事は往古の翻譯より證明せらるべし、シリヤ教會に用ゆる聖書「ベシト」の如きは、第二世期内に起りたり多くの學者は、其起原を二世期の前半期内に置けり、トルチュリアンの時に於て普通用の古代ラタン譯書は、百七十年前に成りたるあり
フリヂアに於てハイラポリスの監督なるパピアスよりして

馬太、馬可兩福音書の編成に關する詳細の記録を得るなり、彼はポリカール(紀元六十五年に生れ百五十五年に死す)と同時に代の人にして使徒等と親密なりし人々より、智識を得ることを勉め又親しく基督直接の弟子ある長老ヨハチ及びアリスチヲノと、評議したるともあり、アイレノオスの考ふる所によれば、彼れは使徒ヨハチと親密なりしと、然れども是れ古代教會の歴史家ユーシピオスの疑を容るゝ所なり、パピアスの神言の解釋と稱する書中、長老ヨハチに就き曰く、長老の云へるに、馬可自らベテロの通譯者となり、凡て記臆せる所を、詳細に記録せり、然れども其の順序は、基督の教へ且つ行ひ玉ひし如きにあらず、蓋し彼自ら主に聞き、主に従ひたるにあらずして、後年に至りベテロに件ひたればあり、云々と又馬太に關しては云へらく、馬太はヘブル語を以て神言を記録し、各々其の能力

に從ふて此れを解釋せりと
 パピアスの言へる所に據れば最早馬太傳をヘブル原語より
 通譯するの必要なかりしが如し、即ち馬太傳は既にギリシヤ
 語に譯せられたるもの其の掌中にありき、或る學者の説に曰
 く、パピアスの言語中神言の字は、宜しく談話、或は訓言とすべ
 し、馬太原書は、多く基督の談話より、成る者なりと、又書中の記
 事録は、ギリシヤ語に通譯せらるゝ時に於て、付加せられたる
 なりと假定せり、縱令馬太福音書は著作後に至りて増加附録
 せられたりとするも其馬太の作たるとは、今も尙ほ信用する
 所なり、其の今日の結構に於て、紀元七十年メイトス帝エルサ
 レムを虜にする時、已に存せる事は、内證より後に至りて論ず
 べし、若し其一部分は馬太にあらざして、他人の手に成りたり
 とせんか、其の著者は同時の弟子にして、馬太の記録と共に確

信すべき十分の教權ある者なり、即ち此の馬太傳編輯人は、馬
 可路加等と同地位に立つ者なり
 福音書の誠實なる一證は、異端邪説を主張する者、此れを使用
 し、又教會に教權を有せる者の如く鑑定したるを以て見るべ
 し、此の福音書に依て、己れの異説を維持せんと試みたるにあ
 り、第三福音書の爲め、茲にマルシオンより特異の證據を得た
 り、彼れはマルシオン派の祖にして、紀元百四十八年シヨスチ
 ン、第一の教話を書きたる時に當て、活潑慍悍の異説家なりき、
 小亞細亞のポントスに生れ、ポリカープと相識り、百四十年の
 頃、羅馬に在り、ポリロの教理に熱心し一方に偏して其説を誤
 解し、他の使徒等の教を承くるを欲せず、遂にポリロの書翰、及
 び路加傳よりして、經典を編輯したり、素より路加福音書中よ
 りも、舊約の律法の教權を是認する所は、悉く除き去れり、マル

シオンの用ゆる福音書は今尙ほ切斷刪除されたる路加と稱せらる、宗派を盛んにし、マルシオンの爲す所を達せん爲め、第三福音書を截斷したるは以て今日に存する路加福音書は、當時全教會の受信せる所なるを明かにする也、マルシオンの此の福音書を殊に撰みたるは、路加はポロの弟子たることを皆な知りたればなり、此に由て之を觀れば、使徒等と同時代の人々、未だ世に在る時既に福音經典は、教會中に教權を有する教書なりとと明瞭なり

最初の三福音書中にも亦其の早存の證あり、早存の證は又事實の證なり、此書若し使徒等の未だ此世に存在せるの時に當て其指揮に由りて編輯したるにあらずして、僞作なりとせば、争でか使徒等より教訓を受けたる者の信用を得んや、内證中尤も重要な者は、エルサレムの滅亡と、基督の再臨に關する

最初の三福音書に於ける内證

預言なり、馬太傳に由りて見るに此の二事變の間に、寸時の猶豫なし、馬可路可兩書にて見るに、其間甚だ短かきか如し、今茲に此これらの章句を詳かに解釋するの必要なく、繼令如何なる説明を採用するも只此の一事を明かにすべし、即ち若し福音書の起稿前に云へるより後年にありとせんか、殊に馬太傳に現はるゝ如き、エルサレムノ滅亡と終りの審判との關係は、存せざりしならん、實直に事物を考究する者は、必ずや最初の三福音書は、未だ基督より直接聽聞したる人々尙世に存する時、著述せられたるを信すべし、馬太傳はエルサレム、未だマイメス王に亡ぼされざる前に成れり、然されば彼の預言の部を説明すると能はず、馬可傳も、亦然り、宮殿の荒廢、市街の侵略前に成れり、路加傳の起稿も、亦此の大擾亂後、數年内にありたるや疑ひなき也

四福音を熟考するに、地名、田舎の風儀、特異の思想、感情等の引照多くして、到底後年に至りて、作者の偽造編綴する能はざる所なり、此等は皆當時、パレンステナ及び風土習俗に通知せる者の、自ら記録したるや明かなり、其の引照する所、悉皆確實にして、福音書は實に使徒時代のユダヤ、ガリヤを摸寫せる者なり

第三の福音書、及び使徒行傳は、共に古代教會に於て、ポウロの伴侶、ルカの作なるを敢て異議する者なし、先づ文跡より論ずるときは明かに見るべし、使徒行傳に、先きに書を遣りたることを述べ、兩書共にテオピロに送りたるなり

第三福音の著者は、書中の事變に遭遇し、且つ此れを目撃したる證人より其の材料を得たりと稱せり、(路加一、二、三)彼れは事實を或は口傳より、或は記録より、學びたる也、其の目的たるや、

精確連續せる一つの物語を示すにあり、此の序言は著者自ら言へるなれば、眞理にして疑ふべき理なし、彼れ一時ポウロと、同伴せし事に於ては著しき證あり、使徒行傳の物語を見るに彼れトロアスに達する迄は、(十六の十)實に他人より其材料を集めたる歴史家の様子あり、而して茲に至りて卒かに文跡一變し一人稱複數に遷るを見る、「直ちに吾等マセドニアに行かんと試みたり」と此く著者がポロと相伴ふの意を表する、代名詞を用ゆると、使徒、ピリピに達する迄に至る、其れより使徒第二傳道旅行中、此れを見ず、其著者は、ピリピに於て(二十の五)再びポロに出會してロマ迄侶へり、彼の恐ろしき航海と、難船の形容等は、自ら此れに遭遇したる者の記載せることを疑ふこと能はざるなり、斯く書中吾れ等の代名詞あるは、使徒行傳の著者(即ち第三福音の作者)が旅中暫らくポロと同伴し

たるにあらざれば、他に解明の方なきなり「吾等」を用ひたる章句の文脈の、他の部分と同一脈なれば、他の著者の書したる教書より、抜萃したりとの説を容るべき所なし、又此れに由て讀者を欺かんとするは著者の意にあらざるを深く信ずる所なり、非難する者曰ポロ^ロと他の使徒等の關係、及びポロ^ロの教ゆる所と他の使徒等の教ゆる所との異同に於ては、使徒行傳に見る所と、ポロ^ロの書翰中に見る所と、大に齟齬せりと、此の非難は、殊に使徒行傳第十五章、即ちエルサレム^ムの會議に關する一事にあり、此時ペテロ^ロはポロ^ロ、と其教義を、反對を唱へたりとせり、此の議論たるや、歸する所、使徒行傳の著者は誰とするも、使徒時代後に來りて、詐偽を企てたる者なりと云ふにあり、然れども是れ全く無根の言にして、ペテロ^ロ、ヤコブ^ブ、ヨハネ^ネ等は、

ポロ^ロに誨を加しと無く、却て彼れ等に右の手を與へて、交を給べりと、明言せるを以て論破すへし、(加拉太二の六と九)此れ亦ペテロ^ロは全く猶太主義に非ることを證す、斯くて公然たる評議のありしと、ポロ^ロの語中に含めり、(加拉太二の二)其の結果は、使徒行傳に掲ぐる如くありし事疑ふに由なし、ヤコブ^ブ及同感の使徒等は、素より異邦信者よりして、猶太主義に多少和解適合せずんば、満足せざりしなり而してポロ^ロの加拉太書に證するを見るに、終に十分満足の意を表したるを知るべし、第四の福音書は、他の福音書より大に異なる所あり、多くは耶蘇^スエダヤ國の傳道を記す、此の福音に據るに、基督宣教の働きは三年の外に出ず、然るに他の三福音のみに由りて見れば、其の傳道は只一十年の如く思はる、又約翰傳にある、イエスの教訓、談話の文脈は他の福音書に録したる、基督の言の文脈と大

に異なれり、然れども此の差異は其實互に相齟齬すると無し、
 ユダヤに於て基督の働きの如き、又其の年限の如きは、他の福
 音書に於て約翰傳にある所を度を確定するとあり、(馬太廿三
 の卅七)又約翰傳にある所と同主意なる耶蘇の教訓を他の福
 音書に於て見るとあり、(馬太六の廿七)又耶蘇の言と稱して其
 實或は約翰自らの言の如く、或は其物語中にある他の人々の
 言の如く思はるゝ者は他ありヨハ子其師の意を解釋して、此
 れを簡單にし、且つ自己固有の文脈にて記録したりと假定せ
 ば、容易に理解し得べし、此第四福音書の斯く特異なるは以て、
 其の誠實なるを證するに足る、若し使徒の名を假り詐偽を企
 つる者ならば宜しく、早くより能く信用せられたる、福音書に
 首尾よく類似せしめんと欲するなり、斯く特異の條々多きを
 以て、約翰の此れを著はしたりと云ふ、確實なる證據あるにあ

約翰傳の
 他處に大
 差あるは
 其誠實な
 る證

アロガイ
 黨

らざんば、全教會及び教會教師等も此書を疑ひ且斥けたりし
 ならん、然れども此の第四福音書は第二世期に於て、普く信用
 する所たり、只教理上の理由にて紀元百七十年頃、セアチラに
 於てアロガイの黨のみ、此れを好きざりし、此異説派と雖(使徒
 約翰と同時代なるクリソソス主唱者なりと)撞着せる所あり、
 蓋し其言ふ處此福音書は早くより存するを證し、又異端新
 説を唱ふる者の書したる福音なれば其の云ふ如くエベン、及
 び小亞細亞の諸教會に於て普く信認せられたるとは承知し
 難きとなれば也、且つアイレノオスの證する所と其のポリカ
 ープ及び小亞細亞地方にある人々と親密なるを以て考ふる
 時は彼れの證據確實なることは、既に前に述べたるが如し
 第四福音書は、パレンスチナ、ユダヤ人の著す所なり、言語の特異
 なる此れ其一證なり、且つ福音中僻邑陔里の異風特性に至る

迄、詳かに寫し出したる所多きを見れば、著者は物語の現状を能く知りたるに相違なし、此れ懷疑者と雖も許諾する處なり、レナン、五章に在る貴人の子息愈されたる事に就き、曰此れ自らカナよりカペナウムに旅行せし者の書する所ありと、アイレニオスは彼のヨハ子の弟子なるポリカールより聞きたる所を記念するに於て誤りを爲すと能はず又ポリカールが屬々好んで其の人に關し、己れの記憶する條々を物語せるは何人を指して語れるやを誤つ能はざりしあり、ポリカールを尊重せし人々の中に在りて、アイレニオスも其一人なりしが、第四福音書の著者、及年代等に於て疑議する者なかりき、第四福音書の中に其の著者の隱然として顯はるゝ様子は、以て其書の誠實なる一大證據と云ふべし、物語中に於て、數々名を稱すると無くして只或る弟子とのみ記せり、晩發の時基督

の愛する一人の弟子、イエスの胸に倚りてありし、(十三の廿三)「ペテロと共に耶蘇の愛する他の弟子も、イエスの墓に行けり、(廿の二)等の如し斯く彼れは他の弟子或は其の他の弟子と自を呼べり、又アンデレと共にイエスの住所に従ひしも、(一の卅九)彼なると疑なし、基督の「パプアスマ」を受け玉ひしより第二日に彼、及びアンデレは、師なる「パプアスマ」のヨハ子と共にありしが、ヨハ子過ぎ行くイエスを見神の羔を見よと、語れるを聞き、基督に従へり、耶蘇回顧して云ひ玉ひけるは、爾曹何を求むるや、答へて主よ何處に住むやと、彼れ二人を招き、來りて、見よと言へり、彼れ等の耶蘇に従へる時は四時頃なりき、是れ我等の熟知する所なり、此の名を匿したる弟子は、ヨハ子にして他の形容代名詞を以て示す所の者と同じきは疑なきなり、他の弟子とは、ペテロにあらず、ペテロは同僚なりと記さる、又ヨ

ハチの兄弟あるヤコブにもあらざるなり、彼れは使徒時代に早く死せり、(使十二の二)然らば基督の最も親愛し玉ひし三人の弟子中、只ヨハチあるのみ、今此の如く己れの著者を示すの隠法は、自ら己の名を記載するを憚かるの感情に出でたるなり、殊に己は耶穌と斯く親愛の交あるを語らざるを得ざればなり、人を欺かんとする者ヨハチの名を詐用して、何ぞ斯く自を示さん爲めに奇異の方法を用ゆるをせん、是れ偽書の文脈に全く違反するなり

此福音の巻尾に於て多分其世に公けになりたる後に至て追加せられたる公證あり、其言に、(廿一の廿四)此等の事に付て證をなし、且此れを書せし者は、其弟子なり我儕其の證の眞なる事を知れりど、古昔の傳説に據れば此の福音はヨハチの死後、エベンに於て、其弟子等の世に公にせる所なりと、此れに由て

ヨハチの
弟子等の
証

之れを觀れば、此の保證は福音書を保存したる、弟子等より來れる者なり

或は此の福音書はヨハチの弟子等が其師より學びし所を記載したる者なりと想像する者あらば、是れ第一前節拔萃したる證に反し、第二著者謙遜して己れの名を秘するの理由に疑を容れざるべからず、「ヨハチの第一書の文脈は以て第四福音書と同一の著者に出づるを明かにす、此の書翰に於て、著者は耶穌と偕にあり、彼れの言行を親しく見聞したりと明かに告ぐるを吾儕知るなり、(約一書一の一)

著者はイエスと親しく相識るとは、一人稱の複數代名詞を用ゆる内に明かに顯はる、「我儕、其の榮を見るに」(一の十四)とあり、又自明かに云ふ、彼れは十字架に磔りし、イエスの脇より血と水と流出したるを見しと、(十九の卅四)若し然らずんば、我儕

著書は誰なるにもせよ、欺詐を企てたりと言はざるべからず
第四福音書は自傳記の類にして、著者のキリストに於ける信
仰と、其の來歴を述べたるなり、書中友情の深きを見、且つ忠信、
切愛の精神に富めるを見ば、互に相親密にして其の弟子たり
しとは明かなり

傳説唯一
あると

斯く論じ來れば、四福音書は、使徒等及び博識ある、同時代の人
々の著作なると、明瞭なり、縦令ひ著者及び年代を確定すると
能はずと假定するも書中使徒等がキリストの人となり、及其
教訓と事業に、關して話したる物語の全斑を表したることを信
ずるを得べし。シヨステン、マテウス、及び二世期の著述家に質
して此の、外基督の事を教ゆる傳説のあらざるを知るべし、基
督教の反對者も亦他あるを知らず
紀元百八十年頃基督教に駁論を試みたるセルソスは尤ども

セルソス

鋭き攻撃者なり、テリゼンの答辨よりして其の説の大部を知
るを得而してセルソスの反撃批評の目的なる、基督の一代
記を窺ふに福音書に録されたる所と全く符合するを見れば
セルソスも亦基督の教訓事業に關して、他に異なりたる思想
無かりし也

第九 使徒等の證據は能く信すべき事

吾人は今福音書に於て、使徒等の證據に接す、基督の言行に關
する眞理と稱する所の要領、茲に在り、使徒等は果して信ずる
に足るや、否やは、一大問題にして、若し使徒等にして詐偽を企
てたるにあらず、又自ら誤謬に陥りたるに非らずとせんか宜
しく其の證を信ずべし、使徒等果して、欺騙人なりしや、然らざ
れば迷信者にして、事實と妄想とを分別する能はざりしや、惡
徒か將た蠢愚の徒なりしや

使徒等證
人たるの
感あり

使徒等は自ら證人たるの任あるを知れり、基督に撰まれ基督
と偕に在り、其の言を聞き、其の行を見たり、其の誠實なるに疑
ひなき聖語中ペテロは彼のユダ亡びて後、其の欠を補ふ者の
撰まれんとを願へり、而して彼れは使徒たるに最も大切なる
一事、即ち耶穌の復活に付き、證を爲し得る者にあらざるべか
らずとせり
使徒等は常に弟子たるの感情を決して失ふことなく、受教者の
地位に立つとを忘るゝとなし、實に貴重なる教を衆民に傳播
せしめん爲め先づ己れ等に此を示されたるを思ひ、凡て使徒
等の望は、決して創教にあらざして、傳教にあるの事實に基づ
けりと謂つべし
其の物語を話すに當てや、實直なる證人の如く、沈着ある所あ
り、只事實を簡單に示して以て足れりとせり、縱令ば彼のユダ

使徒等は
弟子たる
感情を
常にせり

使徒等の
沈着なる

誠實無私
なる

を少しも誹謗罵詈するとなきが如く、只其爲したる所を書綴
て止む而已
使徒等及び他の弟子等の誠直無私なると、又明かなり、縱令ば、
ルカが、ポロユダヤ人等の聳動に取圍まれたるを記する
が如し、(使徒二十一の二十七以下)彼等ポロはキリシヤ人を
宮殿に入れ、聖處を汚したりと叫べり、ルカはユダヤ人等の擾
亂すべき理由ある事實を明示して包むとなし、彼等はエベン
人トロヒモスのポロと偕にありしを見、且つ共に宮殿に入
りたることを聞けりと録したり
使徒及び著者等は、己れに汚辱となる事を憚からず、記する
に由て其正直なるを顯せり、ペテロは三たび主を知らずと
云ひし事を話せり、故に此れマカ及び他の福音書に見へたり、
又耶穌の譴責にも正直に記載せり、使徒等互に大ならんとを

己れの耻
辱たる事
實を載す

争ひ、主の譴責せる所となりたるも馬可傳九の三十四と、路加傳九の四十六にあり、使徒等心鈍くして、基督の言を理解する能はざりしと、馬太傳十五の十六及十六の六と七とに記せり、彼等の誠實無私なるを示すの善き證他にあらんや、彼等は皆な主を捨て、去りたるを馬太二十六の五十六にあり、然らば彼等自己を思ふとなく、只目撃したる事件と主と呼び、師と貴とぶ、基督に於て自ら感じたるまゝを明細に記したると、明かなり、眼前の大事に自己を忘れたりとは、夫れ此を謂ふか、使徒等の忠實熱心なるは其の世に公けにする證據の爲めに受くる所の困難辛苦を厭はざるを以て知るべし、ポロは使徒等を總稱して萬物の塵垢の如しと、(哥前四に十三)云へり彼れ等毫も利己主義あるなく、却て朋友の憎惡、困難、輕蔑、苦痛、迫害、刀劍、死刑を受くるを以て自ら見親しく聞きたる所を證す

使徒等の熱心

ストロイス氏の反對論に答ふ

る爲めに望める所の報酬なりとせり
福音物語の眞なるとは當時其の國の風俗、習慣、風土に數千の引照、符合せるを以て證すべし、此れ等は皆な福音書の起原を明かにし併せて其の信すべきを確證す
福音物語は、人を詐かんと企より起りたりとの説は、證なきが故に論するに足らず、只奇跡の一事に關して、ストロイスの妄想説あり、其説に曰く、古へ基督の信徒は舊約中メシヤに關する預言の事を思ひ、又預言者の行ひたる奇跡を考へ、遂にイエスも病を愈し、死人を蘇へらしたりと、想像せるなり、故に奇跡上の話たるやガリラヤの隱道社會に於て、基督信者の想像より自然に發表したる者なりと
此説素より採るに足らず、使徒等の監督より斯く隔絶したる信徒は果して何れにありしや、事物の前後を考へず、一時の妄

想より生じたる感情と迷信は、如何ぞ基督信徒の信仰は、四方より攻撃を受け、反對論に迷ふ時に際して、生出並立するを得んや、メシヤは奇跡を行ふべしと信ずる者にして、若し基督此れを行はざりしならば、何ぞ彼れを信ずることを爲ん、彼輩は奇跡あるべしと思ひ、故に其欠を補はんが爲めに妄想説を編成したり然り而して實際奇跡に乏しきも、基督のメシヤなることを信ずるに於て妨なかりせば、奇怪と謂つべし、イエスの死と福音書成就の間は、時短かくして、妄想小説の起るに由なし、加之らず福音書は小説を編成せりと想像されたる如き偏隘、隠遁主義弟子等の手に成るにあらずして、使徒等及び其教訓を蒙れる者より來るを以て考ふる時は、反對論の是非を決着すべし、此外尙ほ奇跡は、基督の教訓と深く相密着し其一を取りて他を捨つると能はず、奇跡の事柄を除かんと欲せば、基督の

福音書中
に
ある
齟齬

訓言に於ける記録を疑はざるべからず、然りと雖ども基督の言は真正にして、疑ふと能はざるなり
福音信すべからずとする論者は書中相齟齬する所あるを以て口實とす、(第一)之れに答へて曰はん抑も論者の齟齬と稱するは實在なるにせよ、又虚空なるにもせよ斯くあるは以て著者記録者間に謀欺謀騙あきを證すべし、(第二)斯る齟齬、不精は凡て人間の證據に屬する通弊也、若し一點一畫も其の精を欠くときは其證人、或は著者は信すべからずとせば、世に信すべき者一事一物もあるなし、法庭宜しく閉づべし、蓋し正實なる證者も細事に於て一致すると、殆んど無ければなり、凡ての歴史上の書籍も、目撃せし事實を記したる物語も、排斥すべし、バール曰く記録せる事柄に少々參差ありと稱して、物語の全體を放棄するより甚だしき、不道理なる舉動あるを知らず、人間

の證據に大同小異あるは、通性にして、法庭に於ける日々の經驗も吾人に此れを教ゆる處なり、一事の始末を數人の口より聞く時は、其間に多少の參差なきを保し難し、反對の地位にある者、此れを引ききて自黨を辨護せんとするも、敢て審判人を動かすと能わざる也、と今或る證據中に差異ありとせんか、又或る報告中に、不精密の點ありとせんか、果して此れ等は記者、證者の信頼すべきを失ふ如く大なるや、其の言ふ所の全部に疑を容るゝ如く多きやを、先づ尋ねざるべからず、第三、縱令斯る小差の存するありとするも、福音書は決して全部の信用を弱くする如き、差異の其記録中に在るなきを證い得べし、此の福音書は、純粹なる歴史にあらずして、日記なるを記憶すべし、故に其完全なるを以て目的とせず、又達筆者の手にも成らず、故に實に緊要なる事實も甲は此を略し、乙は此れを掲ぐ、此の如

異敬の奇跡
基督の奇跡

き記事に於ては、或は撞着する如く見ゆると無きにあらざれども能く他の事情を探究せば、其の疑を取去るを得るあり、新約書に在る奇跡の信仰に反對せんとするもの、世に無數の信ず可からざる、奇跡の妄説虚談あるを以てす、此の反對説たるや、多くの記事に於けるも、亦然り、吾人聞く處、讀む處に於て、數々過謬あり、詐偽あるを以て凡て記録せられたる事は信ぜずと云ふに等し、又不理ならずや、福音書中にある奇跡は、他の虚妄説と異なり、明かに證せられたるものなり、證據の與へられたる状態及び證者の性質と二つながら相考へ、此の二分子の強弱によりて又奇跡に於ける證の輕重を計るべし、第一、福音の奇跡は默示を證するに在り、奇跡の現はれたるや天啓教の進歩中著明なる時代に限り、此れに反して世俗の

奇跡と稱する者は、只異變にして、天より出づるにあらず、又確
 定の目的ありて行はれたるにあらざる也
 第一、福音の奇跡は、當時流行せる信仰と合し、此れを擴張せん
 爲めに行はれたるにあらず、此れに反して、當時非常に抵抗を
 受くる教の爲めに、行はれたるなり、基督の奇跡は、彼れに従ふ
 信仰を起し、且此れを強くせん爲めの方便なりき、古代父老の
 記したる處、中古小説にある奇跡の如きは、既に人心に傳染せ
 る宗旨と調和して、衆民の渴望せる處なりき、此れ大に異なる
 要點なり
 第三、基督の奇跡の、實事なるを拒まんには、使徒等の證に反對
 せざるべからず、當時ユダヤ人の中に行はるゝ惡鬼を出す、奇
 跡は、尤も疑はしき者なり、然れども此れと比較して、尙ほユ
 ダヤ人は、基督の愈やし玉ひし、所業の巧妙なるを見て、ヘルセ

ブルによりて惡鬼を退出したりとせり、凡て基督の奇跡ハ、人
 の豫想外に出ず或は曰くユダヤ人は天然法を知らず、故に容
 易に其奇跡なるを信じたりと此れ眞理に反せる也、天然不變
 の思想は、福音書中常に見ゆる所なり、ガリラヤは都邑多く、商
 買に従事し、民皆な愚ならず、常事と、奇跡の差別は能く識れり、
 世の元始より以來、生れながらの瞽者の目を啓きし、人あるを
 聞かず、(約九の卅二)とは人々の感なりき、「ニコデモ」曰く神若し
 人と偕ならずば、爾か行せる此の休徴は、人此れを行こと能は
 ずと、(約三の二)「パリサイ」人、祭司曰、彼の僞者生きてありし、時、三
 日の後甦らんと言ひしを憶起せりと、(馬太廿七の三十三)斯る
 世に於て、斯る不信の眼前に、使徒等は其の物語を爲したり
 第四、使徒等は迫害困苦の試を經たり、彼等の確言したる所は
 果して事實なりしや、若し此點に於て心中疑ありたらんにハ

當時宗教上の權威に壓せられ、危険苦痛に攻められて、己れの信ずる所を捨て、降服したると疑なかるべし。第五、使徒等の證を爲す時に於て其の心裡の慣習は、異教の奇跡異能を記録せる人々の心狀と同一視すべからず、此種の事變に關する證をして不完全ならしむもの二つあり、其(第一)は、實際起りたる事實を明かに識別するに乏しきと(第二)は、只異變を願ふの欲なり、之の情や、只に心の視力を暗くするのみならず、一事一物に對して決斷力の作用を害する如き輕信を生ずる也、此の二欠點は、他の美德敬虔と共に存するとあり、使徒等の證を爲すや、殊に著るしきは心の沈着なると、共に識別分明及び眞理を尊ぶの知覺なり、是其證をして確實ならしむる所以なり。

新約に書する、奇跡の嚴格簡單なるは、妄想奇談と比して大差ある處なり、他書に載せ、異教徒及び中古の小説に現はる奇跡と稱する者の、奇異、怪談、嫌惡すべき者あり、敢て福音の基督に於ける、奇跡と日を同ふして論ずべからず。終りに基督の品格を考へんに、全く無類無比にして到底人の想像より出でたるにあらず、此の清潔なる品格と偕に基督生涯の働きを示して、眞理に付きて證を爲さん爲め、又亡びたる者を救はん爲めなりと云ひ玉ひしを考ふれば、理外の能力は世に於て、基督の働と相伴ふの相當なるを見るべし、何ぞ基督の能力も其聖清慈愛と共に、皆な神より出づるに非らずと云ふを得んや、奇跡成り難し、奇跡信じ難しと稱する説、茲に全く消失すべし。

第十 福音書より基督の復活を證す
福音の物語の信ずるに足るべきや否やは前條既に論ぜり、今

事實の大
切なるを

其記載せる基督の復活に關する證據を此れに質さば前章に於て陳べたる使徒ポロの實證に原く議論をして、一層確固ならしむ、素よりポロの證據のみを以て考ふる時も、其結論即ち、基督の復活したる一事の正實なるを保つべきなり
基督復活の事實たるや、尤とも大切なるとは、使徒等も熟知せる所なり、此の事實の眞偽によりて、己れ眞實なりや否やを定めらるゝも甘ざる所なり、若し基督復活せざりしならば、彼れ等偽りの證人と稱せらるゝも願ふ處なり、(哥前十五の十五)と、又主の復活は、救の教と、相關係して、分離すべからず、此れに由りて以て罪惡より救はるゝの望を得、此れに由りて以て未來の幸福を望むを得るなり、と(哥前十五の十四)彼等は基督と其復活を宜く傳へんが爲めに四方に奔走したり、(使十七の十八)斯く此の中心たる事實を貴重するは、以て基督復活に關する

基督實に
死したるに

使徒等の證據に益々信仰を固からしむ使徒等は能く注意を加へて、凡ての教理の根據たる眞理を誤まらざらんを務めたり基督實に死したりとの一事は最早辨ずるに及ばず、若し十字架の苦みと、脇の傷とに、係らずして、生存するを得べしとせよ、又彼の死せりと見るとは、一時の悶絶にして蘇生せりと假定し得るとせよ、基督の生命は如何にして其の肉體に永續したるを得たるや、又何れに往きたるや、何れの時實に死したるや、縱令右の假説より生ずる他の難題は解せらるゝとするも、斯く基督の此世に生存する一事は己れの故意に出でたる欺謀の顛點に達したる働きによらざれば能はざる所也
使徒等復活したる基督に面會したるとは、基督はメシヤなるを以て、必ず墓より復活し、肉體の形を以て現はれざるべからずとの思想より生じたる妄想なりとの假説によりて、解釋す

妄想より
基督實に
死したるに
見らる

る能はず、斯る連続したる道理法の弟子等が胸裡に發達し、而して實跡に原づくとも無くして、斯る連続せる現象の生ずるには時足らざりしなり、彼等云ふ、三日目の朝に於て基督現はれ玉へりど、(哥前十五の四)又肉跡を離れて天國に在る、基督の實跡を現はし玉へりと思ふと能はず、蓋し肉跡の形を以て弟子等に自を示し玉へばなり、又其の現はれ玉へる時の情況を以て其然るに非らざるを知るべし、墓の空虚にして、布残り手拭落ちたるを見出したるを憶ふべし、基督の遺骸は敵の取去りたるにあらず、若し然らば使徒等基督の復活を証する時に當て、彼等此れを露はして、以て使徒等を排撃したるあらん、又欺謀の意なくんば教友の隠匿したるにもあらず、然して使徒等は詐偽を企つるものにあらざるは、今日一人も疑ふ者なき也、終りに臨んで、復活の尤とも確かにして疑ふと能はざるの

墓の空虚なりし事

基督の弟子等の面會

會合の度に制限あると

證據は、即ち基督及び弟子面會の性質なり、第一の安息日に於て、五度の會合あり、弟子等其心に疑抱きたりしが、基督其不信を解き玉へり、基督は弟子等と相話したり、弟子等は主と相語りたり、彼れは弟子等と歩行せり、彼れは弟子等と共に食したり、弟子等は彼れに觸れたり、其一人は指を釘の跡に差したり、主肉跡を以て現はれたる實事は、ルカの所謂確かなる證に(使一の三)由て知るべし、即ち五感に訴ふるにあり、現はれたる度多くして其様も異なりたるに訴ふるにあり、妄想説は全く不道理なる假説のみ

尙ほ一事を追加せんに、基督の弟子等に現はれ玉へる、其度数に制限あり、其の大略は使徒ポロの記載せる所なり、其他福音書に載する所僅々二三に過ぎず、凡て此の會合は、暫時にして止みたり、若し此の面會たるや、想像より起り、妄信に原づく

とせば時遷るに従ひ、益々多く、益々感情を勵ますべきなり、批評家懷疑學派の泰斗たる者も基督の復活に於て、使徒等の確乎不動の信仰を、解明する能はずと公言したり、只茲に一つ道理に合へる解釋あるあり、曰く事變眞に起りたるなり。

第十一 使徒等意見に於て誤謬ある事

使徒等は或る問題に於て、誤りたる意見を持てりと非難する者あり、抑も使徒等に於ては、權威あるにあらず、又其宣教職務に關する事柄と、イエスの授け玉ひし勸の外、智識に於て他人に勝れるにあらず、又星學或は他の學術等の智識に於て、當時のユダヤ人の右に出づると、自稱せざりき、恐らくは他に使徒等より遙か學識に富める者、多く在りしならん。若し宗教上の意見に於て誤る所ありとするに非らざれば、反對論や採るべき所なし、又縱令宗教上の意見に於て誤りあり

使徒等智識の定度

基督再臨の望

とするも、此に由りて、福音に録する事實に於ける證據を弱くするにあらざれば、其の反對たるや、無効に屬すべし、若し此の誤謬たるや、使徒等の「インスピレーション」の本質、定度に關係せば、宜しく思考すべきの必要ありと雖ども、然らざれば敢て勞するに足らざる也。

然りと雖ども、宗教に密接の關係ある諸點にして、使徒等誤解に陥りたりと稱せらるゝものを、研究するは無益にあらざるべし、其一は、即ち基督の速ある再臨を望むと是れ也、素より彼等明かに曰ふ其再臨の時は示されずと、「その日其時を知る者は、只父のみ、天の使者も、誰も知るものなし」(馬太廿四の卅六)と基督復活の後使徒等問けるは、爾今國をイスラエルに還さんと爲か、彼答へて曰く、父の其權にて定め玉へる時、又期は、爾曹が知るべき所にあらずと、(使徒一の七)斯る問題に於ける

答は、父の外世に示されず、約翰傳に於て基督はヨハ子に付き
 ペテロに語りて曰、我若し彼が存て我來るを待を欲は、爾に何
 の與あらんや、(約廿一の廿二)と此の言兄弟の中に傳はりヨハ
 子死なすと云へり、然れども此の誤りは廿三節に基督の正し
 玉へる所となれり、パーレー氏曰此の傳へ古代信者の意見と
 して、我儕に傳はり、且つ其誤解の生じたる事情全く失せりと、
 假定せよ、今日に於て、人此の誤を引き、基督教全跡に誣言を加
 ふ者もあらん、人若し聖書は吾等をして古代の信者、及び使徒
 等は其生涯中に審判の日近づくを待ちたりと信せしむると
 せば、恰もヨハ子の長命に於ける誤謬に關して、吾等の爲した
 る如き同様の駁言を生ずるならん、然れども此の誤謬は使徒
 等をして詐偽を企てたる者とするが如きに非らずと、使徒等
 は基督再び速かに來るとを待てりと、思ふ者は、其の書中に此

の待望の痕跡を見出すも怪むと勿れ、又此の思想の影響は、福
 音書に録する基督預言の略報を採色するを見るも亦怪しと
 すべからず
 新約物語中他の難問とする所は即ち悪鬼に關する一事なり、
 人の靈魂、此の悪鬼の横領する所となり、肉跡上の病氣を蒙り
 癩癩、或は狂氣を以て身跡を苦めらるゝ如く記載せられたり、
 或る基督教主義の學者の説に由れば、此の事に關する基督の
 言たるや、只當時流行せる信仰に適合したるよしして、其の勢力
 の下ゝ在る者を愈さんが爲めなり要するに斯く病に侵され
 たる者と同感同意を表して、其の快復を計りたる方便なりと、
 當時の誤信は宗教上より觀察して、別に害あるにあらず、基督
 に於て其惑を解くの義務なきは、恰も普通の病理を彼等に教
 へて、醫術上の迷を晴らすの義務なきが如し

此の解明を以て不満足とする基督教主義の學者輩は、當時人心善惡の争ひに由りて抑壓混亂せられたる時に際して、惡鬼の横領は事實なりと信ずるを以て満足せり、當時一個人、又一社會宗教上の生命は實に危急存亡の秋なりき、而して惡鬼の此の如き作用を人心に顯はすとの出來得べからざるを教理上拒むに足る、無形界の智識に乏しきなり

以上二者の説何れを採るも、惡鬼に艱まされたる者の癒されたるの事變は、證明上確乎として疑ふべからず、福音書中此の如き人々の癒されたる記事は其尤も著しき者にして其眞實なるの内證其内に存せり、彼の墓の内に「住みたる、ガダラの狂氣人の如きは此類あり、斯る奇跡と相聯結せる基督の會話及び其の會話の誠實なるは以て此れと結合せる事實の眞實なるを證すべし

使徒等は屢、其の引照する舊約の言を解釋するに於て、其用ゆる議論に於て難ずる所ありとする者あり、縱令斯く難ずべき所あるにもせよ、事實に於ける使徒等の證據を輕んずると毫もあるなし或人は此の如く難ずべき其理由なしと云ひ、又或人は「パーネ」と共に吾人は使徒等の教理と其の議論を差別せざるべからすとせり、教理は默示に由りて來り、此の教理を言論筆紙に於て陳述するに於ては、己れの胸裡に浮ぶ、比準、議論及び鑑定を用ひて之れを説明、維持せざるべからずと、又「パーネ」氏は「ビショップ」、ホルチット氏の言を引き、曰神より召されたる著者、如何なる點に於て論ずる時も其結論を我等常に信ぜざるべからず、然れども其全斑に於て議論の前提若し結論の如く斷言するあるを見るに非らざれば、必ず此れを信ずるに及ばざるべしと

第十二 基督教と舊約教の關係に於ける異論

基督教と反對を試むる者、其の論據を舊約に關する難題、及び新約中舊約の引照に關する難問に訴ふることあり。舊約の教は、神に起原し、神の制定せる者なれば、異邦の宗教より全く差別すべきは、新約に於て是認する所なり。基督教は、エダヤの宗教と其原始上關係あるとは、歴史上の事實なり、而してエダヤの宗教と、異邦の諸宗教と、其間雲泥の懸隔あるは、以て基督のエダヤ教と、特許を與へたる故あるを見るべし。純粹ある一神教、神性、及び神政に於けるの教理、及び此の信仰箇條より獎勵せられたる、敬虔禮拜の精神は、以て其教の超理的起原を證する者なり。

基督は、舊約にある預言とメシヤとは己の設立せんとする王國に關するものなりとせり、彼れ又古へモトゼ及預言者等

基督教との關係

耶穌教訓の範圍

與へられたる、律法と義務の默示を輕んずるの意なかりし、故に此れ又總て基督信者の接くる所なり、蓋し基督の權威を以て斯く教へ玉ひ、且つ固有の眞理其内に存するあれば也。

然りと雖ども、舊約書の著者年代等に至りては、歴史家學者等の、研究に屬する者として、基督を始め、使徒等に至る迄此の問題を論じたるにあらず、基督は遺產上爭論の仲裁人たることを拒みたり、曰人よ、誰が我れを立て、爾曹の裁判人、又物を分つ者と爲せしぞ、(路加十二の十四)と是れも由て、之を觀れば、基督は己特別の職務を全ふして、其の範圍外に一歩も出でずと決定し玉ひしや明かなり、吾等基督信者として、基督の意見を下したる問題に關する其の證明は、權威を持てる者の如く、茲に満足すべきは理の當然なり、然るも基督始め使徒等に至る迄嘗て裁決を試みざる説の是非を論じて、基督教の眞理を危ぶま

んとするに至りては、吾人の範圍外に出でたる者と謂つべし、然れども、黙示の漸次進歩と、舊約時代宗教上及び義務上人智の不完全なるとは、基督も明かき教へ玉へり、モーゼが離れよ於ける律法は、基督教徒の理想より卑し、此れ基督の言へる如く、人心頑固よして、美教を容るゝ能はざれば也、(馬太十九の八)故に基督之に代ゆるに、他の嚴格なる誠を以てせり、又曰く「パプアスマ」のヨハナは預言者の中、尤とも大なる者なり、然れども、至少き基督の弟子も、彼より大なりと、蓋し彼れも優りて光を見、聖意を能く識ればなり、眞神の黙示及び宗教上眞理の漸次發達なる一事は、以て舊約書の教訓と、書中に稱讚せる聖徒の品格、言行に關する、多くの疑念難問を解釋するを得べし、實にイエスの信仰せる教と、基督教の關係は、以てイエス

の教の神に起原するを明かす示すなり、其の歴史上の運動を見よ、太古に始まり一條の細流の如く滔々として數千年の間奔流し、キリストに至り、濶然として蒼海となり、愈々進んで、愈々廣く終に全地を覆はんとす、基督の降誕は、歴史を分つて二部とす、故に其の來るや以て之れを理解するを得、基督の人間種族に於ける恩愛の働は、以て救世主の世に降れる前後ユダヤ人異邦人の別なく、凡て萬民に關する神の聖意聖旨を明かにす、各族各民に至る迄、神は豫め其住むべき時と、處を定め玉ひしは之れを教導して以て彼れ等皆な神を求め知り、而して基督の世に設立せんとする普及天國に於て、各の職分を全ふせしめんが爲めなり

第十三 預言より基督教を證す

預言は奇跡の種類あり、人間の先見力にも制限あり、推量すべ

舊約書中
に在る預
言

き曠野の目前に横はると雖とも、信頼すべき預定を爲すと能はず、預言にして、僥倖符會の假定を容るべからざる状態に於て、成就せるに於ては、必ず超理的の作用ありと云はざるべからず、然らざれば他に預言と事實と相符合する所以を解明する能はざる也、縦令ひ預言者にして、時に或は其預言の如く成就せざるとありと雖とも、多數の場合に於て、僥倖に由るにあらず、眞に預定の如く成れりとせば、其人時に臨んで多少人理外の先見力を受けたる者と謂つべし

舊約書は預言の衆流始終貫徹する者なり、ユダヤ人の先導者は常に未來の盛大を希望して現在を以て其の準備となせり、此の舊約の教、及び其敬神上の言に預言の現はる所以の理、三あり、第一、宗教の本質に、大改良あらん爲め、此れをして、益々純粹神靈ならしめん爲めなり、(エレンミヤ卅一の卅一—卅五)第二此

預言者の
一種

の宗教は、世上一般に、卓越超過せん爲めなり、(イザヤ二の二)異邦の民も、此れを接け、全地エホバを識るに至らん爲め也、第三此の舊約教の傳播支配は、教主に至りて、確乎あらんが爲め也、大なる先導者、大なる君王、起りて神の國を普く及ぼし、義と福は其の進歩と伴ふにあり、預言の形跡、千種万狀、ユダヤ國、及び當時行はるゝ宗教より來る分子は、預言を采色し、先見者及び聖徒の視覺に混入せり、然れども此れ等輕少なる點に於て、預言の實驗正史と異なるあるも、以て舊約の預言を、基督及び其教に照し見て、吾人に與ふる、深き感動を減少するとなし、預言者の幽遠なる神企を先見したると、後世代々歴史に證して明か也

茲にユダヤに於て、一種の預言者あり、未來の、事變を預言するを以て其本務となさず、只民を教訓、獎勵、誡諭するを以て神よ

り召されたりとす、其の辨説流るゝ如く、民をして彼等は上より感化力によりて活動せるなり、神彼等の口によりて告げ玉ふなりと思はしめたり、預言者イザヤの如き是れなり、其の預言の要領たる、前に陳べたる數點を總括し、即ちメシヤの全く、且つ榮ある聖國の來らんとすると也。雖ども、其他危急存亡の秋に際して、早晚將に起らんとする特別の事變に關する預言のあるあり、此種の預言の如きは、尋常の才智、先見力の能くする所にあらざるなり、彼の預言者等多くは卑賤より召さる、アモスの如きは牧羊者なりき、然して其先見の及ぶ處、到底人智の外に出づ、彼のイスラエル、シリヤ兩國の滅亡、及び兩國合併して、エダを攻め終に敗れんとする事に關する、イザヤの預言は其一例なり(イザヤ七章)又アッシリヤ王セナケリブ、大軍を以てエルサレムを襲ひ、敗北する事に關するイザヤの預言

は其二例なり、(イザヤ三十七章)メシヤと其の働に關し、イザヤの預言中、神の僕に就きて言へる處、實に著し、(五十二章十三より五十四章迄)其内、國民全躰にも、亦國民の柱石たる者にも、符合せざる章句あり、例は六節に、我儕は皆羊の如く、迷ひて各々己が道に向ひ行けり、然るにエホバは、我儕凡ての者の不義を彼れの上に置き玉へりと、云へる預言の如きは、一個人に引照せる者として、此れ實に基督の經驗に能符合類似するを見る也、基督も自らエルサレムの滅亡を預言したるは、三の福音書に證せるが如し、殊に吾人に感動を與ふる者は、福音の傳播及び天國の勝利に於ける基督の先見なり、天國の傳播は芥種の如し、其の感化力は隠れたる麩酵の如く盛大なるに至らんとす

第十四 使徒ポウロの改心及び傳教より基督教を證

す

心状
の

十字架の事起りてより、四年を経て、タルソのサウロは嘗て、「パ
 リサイ」宗の能力あり且つ熱心なる人にして、エルサレムの學
 校に教訓を受け、基督信者を迫害するに力を盡したりしが遂
 に改心して、羅馬帝國に基督教を傳播する大使者となれり、彼
 れの改心したるや實に突然にして、自ら云へる如く、神、其子を
 異邦人の中に宣べしめんがため、心に善として、彼れを、我心に
 示し玉へりと、(加拉太一の十六)其ダマスコに行く途中に於て
 起りたる改心の模様はルカの使徒行傳に記録せる如く、奇異
 なる事なりき、(使徒九の二以下、廿二の五以下)
 此の事變たるや只天然の理法に由りて説明すると能はざる
 なり、此種の一説は前條既に述べたる、心思錯亂説是れなり、然
 れども前に論じたる如くサウロの心状は此の種の現象を生
 ずべき心の有様と全く異なれり、彼明かに云ふ、彼れは其爲す

所の實に公正なるを信ぜりど、我も亦曩にはナザレのイエ
 スの名に逆はんが爲め、多くの事を行ふは宜こと、自ら意へ
 り、(使二十六の九)と自ら稱する如く、彼は迫害を試みたる者、然
 れども恵を受けたり、蓋彼れ知らずして不信より之れを爲せ
 ばなり、(提前一の十三)惟ふに、彼れは律法の義を全ふせんとし
 て、固難辛苦を厭はざりき、然れども律法の軛は、重荷の如く、彼
 れを苦しめたり、是れ福音の與ふる平安を得る隠然たる一大
 準備とぞなれり、然りと雖も此の律法熱心の決果は毫も基督
 信者に左祖するとなく、基督をメシヤと接くるとなく、反て基
 督に敵し又自ら異端邪説と思ふ所は、憚らず之れを亡ぼさん
 とするの熱心を増さしめたり、前に述べたる如く、汝刑ある鞭
 を蹴は難しと云へる一言は、決して彼れの心中疑念を抱き、自
 ら爲す所の行に反對する傾向ある意を示すにあらざ、只勞し

て功なき事を稱する俚諺にして、基督の道を傷けんと企つる者は、反て益々己れを害するの意なり、東方に於て、牛と御者の有様より比喻を採れる者にして牛にして御者に抵抗せんとすれば、荆を蹴り反て自らを害する也

此の事變は幻象なり

ポロをして福音の熱心なる友とならしむるに至りたる事變は只幻象にありとの説は、何事をも説明する能はず、若し此れを只幻象なりとせば、理外の作用に由らざるは如何して斯る幻象の起りたるやを證せざるべからず、然れども使徒の自ら云へる如く、其改心の時に際して、基督を見たるは後年に至りて見たる默示幻象と全く其の性を異にせるなりと、哥林前十五の八

性質一變したり

奇跡の分子は暫く措き、ポロの改心は性質の大變化なり、彼の生涯の方向一轉じたり、目的の改革と偕に、新らしき心

に、謙遜、仁愛、堪忍、寛大等、凡て基督の精神を以て意とするに至れり、ダマスコに行く途中に於て、起りたる事變の結果たるや、ポロをして基督教説教者たるの大任に當らしめたり、足下に蔑視したる信仰を世界に傳播するの成功者たらしめたり、若し十字架の使徒、ポロの働無かりせば、歐洲の歴史は如何なりしならん、又人間一般の歴史は如何に異なりしならん、使徒ポロは自奇跡を行ひたり、是れ自ら證する所にして、敢て此れを疑ふ者なし、羅馬書に於て、明かにキリスト我れを助けて、休徴と、奇跡を行はしめ玉ひしとを述べり、(羅十五の十九)又哥林多人に書き遺りて、其目前に奇跡と休徴を行ひたるとを、思ひ出さしめたり、(哥後十二の十二)奇跡は使徒たるの證なり、今奇跡を行ふ命令は、基督之を只使徒等に與へ玉へり、(馬太十の一と八)故にポロ及び使徒等の奇跡を行ひたるは此の

命を履行したるに外ならず、然らば基督自奇跡を行ふと公言し、使徒等も、只に基督の此訓言を持つのみならず、其の例證を己れの前に示せりと、斷言するも敢て不可なきなり

第十五 基督教の秀逸優美なるより其の神に起原するを證す

奇跡の證據を考究せんが爲め、基督教の特質、及び基督の品格等は、既に前章に於て論じたり、故に本章に於ては福音の殊勝なる條々を簡畧に觀察せんとす
基督教に所謂神は、全智全能と、聖清、慈愛の徳性を有する者なり、自然神教の稱する如く、世と全く隔絶自存する者にあらず、又凡神説の如く、世と同一なる者にあらず、神は世界に在り、遍在せる元氣を以て、現在し、ホーロの云へる如く、我儕各々を去ると遠からざる也、神は「ペルソナ」にして、人々の心に在る思を

基督教の神の説

人の説及び罪の教

耶穌基督

識り又吾等の祈禱を聞き玉ふ者なり、人は、神に肖せて造られ、たれば又神と交通するを得べし、是れ基督教の教義なり、道徳上の邪惡は、形骸上の邪惡と混同すべからず、其の原因は、人好んで、神より分離したるにあり、從つて下等なる僻性の專横するにあり、人間を罪より挽回せん爲めに、斧を木の根に置かる、救主基督に於て、神世に顯はれ、人間完美の模範、實跡となりたり、彼れに由りて、神再び人間と近づき玉ひ、其の間に平和を結びて、神性と神政の晴天に、一點の黒雲を流すと無かりき、基督に於ては父なる神と親しき交、且つ其の交はりより來る平和を終る迄維持し以て、試惑に勝ち、以て世の憎惡を甘んじ、以て十字架の苦を忍べり、其の神に親密なる生涯は凡て基督の弟子及び信者たる者に授與せらる、此の生涯は基督此世を去り玉ひし後、聖靈の働きに由りて、養成せらるゝに至れり、基督と

耶穌信者の生命

一になり、彼れに由りて天父に近づくにより、信者は凡て世に
 属する者を偶像として愛するとなく、凡ての物を損するに堪
 ゆるの能力を得る也、彼等は神の子等の會を組織して、天父の
 子たるの生涯を務めんとする者を悉く集合し、地上に於ける
 生涯は、即ち未來の用意にして、其優りたる有様を樂まん爲め
 靈魂を薰陶するの預備校となれり、世にある凡ての困難は父
 より來る懲治となり、死は天國に入るの門戸となり、万事は細
 事に至る迄、皆な神の定め玉へる者にして、凡ての物神を愛す
 る者に働きて益をなすを知るなり
 世を利用して、濫用せず、世を樂んで、奴隸とならざる、之れ信者
 の特權なり、此世の幸福を非常に尊重すべからずと雖ども、又
 壓世主義を以て世上一般の交際快樂を蔑視するも、亦善しと
 せざる所なり

福音教は
 隠遁主義
 にあらず

基督教は
 原理ある
 宗教也

基督教は律法にあらずして、原理ある宗教なり、事々物々細密
 なる訓誡を垂るゝとなく、只大目的を示し、此れに照らして以
 て、己れの言行を方正にし、此の範圍内に在て、各々己れの智力、
 徳力に従ひ、一身を左右するにあり、主眼とするは、舉動の動機
 を正ふするにあり、以て人各々己れの律法となり、自然の發表
 に委して律法の制限を脱するにあり、最上の律法は愛なり、之
 より廣大秀逸なる原理あるなし、弟子たるとは、基督の一舉一
 動を摸寫するにあらずして、其の精神を服用するにあり、至善
 至美の標準は、基督の言行に顯はるゝ者より、貴き者なき也
 基督教は、世界の宗教たるに適せり、蓋し普通宗教の要領を悉
 皆所有すればなり、神前に種族の平等、四海兄弟たると、人の皆
 な罪あると、故に皆赦罪拯救の必用なるを教ゆるが如し、福
 音に設けたる救の道は万民に適し一國一民に限るにあらず、

基督教は
 万國民に
 適合す

基督に在りては、ギリシヤ人もユダヤ人も、奴隸も自主の民も、老若男女の差別あるなし、罪人に對し神の愛を教ゆる福音は、万國民に傳へらるべし、人の罪惡を言ひ顯はすと共に救拯、救罪、清潔の道を説く福音は、天下に傳へらるべし、此の高尙なる特性を有し斯く世に適合する宗教は、只ガリラヤの税吏、漁夫の手に成りたる者どす可きや、只人間の智慧に原づく者ど稱して可ならんや

第十六 彼の諸宗教及び理學派と比較して基督教を證す

世上に存在する、他の宗教と比較するに當て、基督教は、唯眞絶對の宗教なるを見るなるべし、此教や他教に存する欠點なく、過失なく、尙ほ其の欠乏せる元素を補充し、又舊約教の不完全なる所を補ひ、完全無缺なる者を呈する者也

ゾロア
トル即ち
ペルシヤ
人の宗教

孔子

古代のペルシヤ人は、其の宗教を、ゾロアストルより受け、光を拜する者なり、其教によれば世界を相反せる二神の分配せる者どす
是れ兩神説にして、又印度の凡神教に混入せる説なり、支那の賢人、孔子は道德家たり、倫理政治に關する教訓を垂れたりと雖ども、無形上の事に説き及ぼすと無し、孔子の書中、金言あるは世人の熟知する所なり、然れども孔子及其他の道德家に於ては皆な消極的の格言にして、或は只特別の關係に就て教ゆるのみ、縱令ば親の子に對する務を説くが如し、「ラビ」の書に於ける金言も亦同一にして、主の祈りの兩三句の如きは古昔ユダヤの禮拜式中に存せりと雖ども、基督の教は空前絶後の新創造なるは、此等に増補修正を加へて、生ける完全なる者を組織せるにあり、恰も此等の金言も、人間の尤大幸福として望む

回教

べき者につき、基督の教へ玉へる所と結合する時は、一層の深意を加ふるが如し、殊に福音の新創造なるは其道德上の訓誡と宗教上の教理、即ち信者と基督の親密なる連絡より受る新らしき生命との關係にある也

基督教の外、世上に於て勢力を有する者は、回教及佛教あるのみ、回教は其の材料を、「ラビ」の書即ち間接に舊約書中より得たるなり、其の獨一眞神を信奉し、偶像を排斥する所は、聖書の教と毫も異なるなし、此等の教理を、眞實に信仰する所、「イスラム」の勢力ある秘訣と謂ふべし、然れども茲に其神學上二大欠點あり、即ち聖書の教ゆる如き神の愛を尊重するとなきと、又舊約のメシヤに關する望に於けるが如き、高尚優美なる未來を明示するの餘地なき是れなり、「イスラム」の道德は、多妻を許容し、奴隸を善視し、肉慾の情慾を満足するの欲望は、「バラダイス

佛教

の望にして、此の報酬は則ち信者たらしむる一方便となれり、回教の下に在て、婦女子は其卑劣なる地位を離るゝ能はず、又基督教の婦女子に賦與する如き、男子と平等に列する能はず、回教は武力を以て傳播する宗教にして、誤謬を制御するに此れを兵刃に訴ふるは、基督教の堅く禁ずる處なり、加之ならず此教は律法の教にして、信者たる者は、「コーラン」にある凡ての誠を一々遵守せざるべからず故に基督を知るも只有名無實にして、基督信者の經驗する如く、品格を高尚にし、心に慰を與ふる基督の感化力は、回教徒の得ざる所なり

此の故に「イスラム」は、之れを奉戴する國民を能く開明に進歩せしむると能はざるなり

佛教は多少徳義を重んじ、克己と親切ならんことを勧め、且つ新約書に見ゆる訓誡に類似する所少なしとせず、然れども、此

ソクラテ
イス及び
プレト
派

等の道徳法は、凡神説と伴ひ、來生を望むの欲を去らんとを勸
むる教と相關す、羯磨ニルバナの教は自己不變、靈魂不滅を説くとなく、
涅槃ニルバナ即ち幸福の有様は、現世に於ては安靜、來世に於ては消滅
(知覺の不變)を云ふ、佛教は種族階級の壓制より免かれしめ、輪廻の恐
れを除くを以て口實とせり、此の消極的の善は、其教の起りた
る國に於て進歩したるの理由なり然れども佛教は歴世隱遁
の道を入れ、其の除かんと企だてたる、二大弊害と等しき不幸
を醸するに至れり、ライス、デビッド氏曰佛教には、道徳法あれど
も立法者なく、世界あれども造物者なく、拯救あれども、永生な
く、罪惡の感覺ありて、赦罪、贖罪、和平、拯救の思想なきなりと
古代理學なる者起りて、人智を照らし、人心を慰藉せんと務め
たり、ソクラテイスの如き、至高の神を信ぜしと雖ども、尙ほ又
多くの主、多くの神々に仕へ、來世の望も亦疑惑の雲霧に掩は

れたり、彼れは我儕を正道に導くべき、確乎たる神言の必用な
るを感じたり、プレトイの如き、徳義なる者は人々固有の能力
に比例して神に肖るにありと教へたり、然れども彼れの神に
關する思想は、漠然として、神の智性徳性に就き語る所、遙かに
基督教有神論に劣れるを見る、加之ならず、如何にして神に肖
るを得べきや、如何にして心にある惡に勝つを得べきや、の
問題に満足なる答辭を與ふると能はず、彼れは道徳上罪惡の
起源を誤れり、此れを無智に歸せり、而して此の病を愈やす良
藥たる理學は、只僅少なる識者の理解し得る所なりと、自ら云
へり、福音の教、始めてローマ帝國に傳播したる時に當て、尤も
も勢力を有したるは、「ストアック」派と、「エヒキリアン」派なりき、ア
ランに於て、ポロと爭論したる者、蓋し此の二派の理學者な
りき

「エビキユリアン」ハ、神を人事と全く關係なき者となせり、故に
其實際は無神論者なるなり、人徳を總稱して、セルフ、レガデー
ンク、ブルードニス己れを利するに鋭敏なる事とす、「ストイツ
ク」派は、一層高尚なる學派にして、平和の源は、神意に委するに
あり、然れども其神意と稱する者は運命と殆んど分別する能
わず、「ストイツク」學者の安心は、天賦の情欲を鎮壓冷淡にして
始めて得べし、最も高き「シュエース」と相交る時も其目的とする
所は「シュエース」より獨立して、高慢なる自特を養成するにあり、
又此派に據れば自殺も善にして且つ益あり、此世の秩序宜し
と雖も、或は自らを重んずるの極、自ら己れの生命を終るべき
場合ありとせり、「ストイツク」派に於ては、世界の存在すべき理
由あるなし、其の稱する、神の攝理に由て得べき善なし、蓋し万
物は全焼に歸着すべき者なればなりと

斯る古代の理學派に反して、基督教は眞神の思想を明かにし、
隨て神に背るべき教義は能く了解するを得べく、又能く従ふ
て益あり、神の攝理は、万民万事に及び、造化の最少なる者も、神
の恩より漏るゝことなく、凡ての事は悉く動きて神の子等の幸
福と爲るを教ゆるも亦基督教なり、天性の感情は腐敗すると
なく、稟性の情欲は活潑なる作用を止めず、困難憂悶に在る者
は、天父の慈愛を信ずるに由りて、平和を得るなり、殊に基督教
は、他宗及び理學派に優りて、救拯の道を備ふ、此れ即ち一方に
於ては、完全なる理想、義なる律法を示し、他に於ては、耶穌基督
によりて、低きより高きに進み、畢竟純全なるに至らしむるの
能力ある道を備ふる者なり
斯の如く基督教は、世にある凡ての宗教に優り、又古代理學の
右に出づるを見るに至つては、此教は彼の賤愚なるユダヤ人

の手に起原したりと考ふるに於ては、其不理なるや明らかなり、彼のユダヤ人は世界に眞理を公布する、只一器具たりし而已

第十七 基督教の世に與ふる裨益より其眞理たるを證とす

惡弊を興し、毒害を流す、宗教は以て偽はりとするべく、裨益を與へ、仁惠を主とする、宗教は以て眞なりとすべし、或る異教及び回々教の如き、少しの善果なきにあらざ、是れ或は其の内に眞理の分子を存するに由るならん、然れども基督教は此等と大に異なり、世に裨益を興へて、毒害を流すとなく、惡習を殘すとなし、其の及ぼす所の善果自他の及ぶ所に非らざる也
基督は其弟子を指して世の光なり、地の鹽なり、と稱し玉へり、是れ彼等の斯くあるべしと、自證せし處なり、素より基督信者

光と生命

は、品格言行の理想に達する能はざるも、基督教は世を照らし人間と神との關係を明かにし、人の義務、及び吾人一生の目的等に於て、光を與へたり、基督教は道德頹亂、人心腐敗を矯正するに於て、大勢力を顯はし、社會を危急存亡の秋に救助し、墮落せんとする世に、文明開化の善種を植付けたり

基督教の結果

基督教は一個人の靈魂の尤も貴重あるを説き、猥りに他人に満足を與ふる爲め其器具の如く使用せらるべからざるを述べ、一人一個の幸福は、即ち其の目的なりと教ゆ、故に福音は、万人皆な神の前に平等なるを教ゆと雖ども、又己れを犠牲とするは最上の義務にして、此れを實行するに於ては、其人に至高の幸福を與ふるとを以てす、以上の原理は即ち自由の源、仁惠の泉なり、只に徳義の模範のみならず、此れを實行するの感動力は、基督の言行に於て示されたり、基督教感化力の結果は、一

家を清くし、親の威嚴を和らげ、母たる者、妻たる者を真正の地位に置き、婦女子を恥辱の有様より救ひ、従つて兒女の身分を改良せり、又此教は正當の報酬を受くべきとを教へて、職人社會を改良し、貧民不幸の徒は怜恤を受て、恩惠を施こさるゝ者となれり、又基督教は社會の自由を擴張し、忠實を勧め、壓制政治を廢止し、世に在り上に立て民を支配する者には、神より遣はされたる者の如くに從順なるべけれども、彼等若し神の律法に反して事を爲さば、従ふべからず、國法をして正義に適はしめ、異邦人も最早敵にあらずして、終に万國公法の設あるに至りたるも基督教感化力の結果なり、斯くて國の大小強弱を論せず、凡て國權を重ずるに至りたり、仁惠の精神も一國、一民に止まらず、万民に及ぼすに至りたり、以上は基督教の結果にして、各人をして新らしき人となす、是れ其能力なり、古より今

に至る迄、其の世に顯はるゝ、感化力を見、一人一個の性質を一變するの結果は使徒の云へるが如きを知るべし、曰、舊きは去りて皆な新らしくなる也、基督教の結果は歴史上の奇跡なり、斯る美果を生じ得る宗教は必ず神より出でたるにあらざるべからざる也

第十八 前世期に於て基督教傳播の迅速なるを以

て證す

宗教蔓延の火急なる、或は不正不義の方法を用ひ、或は兵刃に訴ふるに歸するとあり、回教の勝利の如き即ち是なり、或は、既に存する宗教の嚴命束縛より免かれんとを願ふの餘り、縱令全斑より觀るときは、人心を高尙せらしむ功力なき、新宗教も反て其擴張を扶助するとあり、是れ印度に於て、佛教の進歩したる所以にして、又該教の支那、日本國等に進入したるは此等

基督教は
我欲を捨
つるを捨
要す

の國々に在る宗教と、結合一致したるが故なり
然りと雖ども、基督教の羅馬帝國に進入傳播したるや、其の理
由全く此等と異なれり、此の教はユダヤ人の私心驕傲を譴責
し、外部の儀式を擯斥し、其の異邦人を卑しめ己れを尊む拘泥
心を碎けり、又福音の教は、他宗徒に向つて、全く偶像邪神を忘
却し、其の宗教に關する職業快樂を捨て、且つ凡ての不正不義
の行爲、及び汚れたる肉慾より、遠ざからんとを求めたり、基督
教は富貴、智者の賛成を得ず、助力を受けず、故に普く世に蔑視
せられ、信者たる者は、世人より賤しめらるゝ者とされり、嚴酷
なる法律は基督信者を迫害して、暴政の下に、或は暴民の爲め
に、死に處せられたる者其數を知らず故に基督信徒たるは世
の凡ての物を損するにあり、斯る教理と、斯る困難にも關らず、
基督教は續々多數の改心者を得、遂に羅馬政府の大權も、此の

ギッポン
氏基督教
進歩に於
けるの説

教を撲滅すると能はざるのみならず、其の進歩さへも防ぐ能
はざるに至れり、二三世期を出でざるに帝國中偶像教は全廢
し、邪神宗の痕跡は絶ゆるに至れり
此の迅速なる進歩の原因をギッポン氏別つて五ヶ條となせ
り、曰く初代基督信者の熱心、未來の賞罰、永生永死の教理、初代
教會に與へられたる奇跡を行ふの能力、信者の純美なる徳義、
及び信者社會の結合戒規、是れなりと、然れども是れらの原因
は各々相異なりと雖ども此の五つの者にして、同じ人々の内
に並存するは如何なる故なるや、例は此の熱心と此の美德は、
未來の教と相伴ふは何故ぞや、惟ふに此れらの原因は、悉く基
督教の結果、福音の元素其の自然の効驗なるや明らかかり、然
らば則ち基督教の傳播の速やかなる大原因は、基督教其の
のなり其の固有の特性の致す所なり

尙ほ近代に於て、有名なる史家レツキー氏が、ローマ改宗の原
 因を明瞭にせんと苦心研究したる結果として與たる解釋は
 大略左の如し、曰く基督教の大勝利を得たる所以のものは、奇
 跡によるにあらず又預言よりの論證によるにあらず、只新宗
 教は能力あり且つ人心を感動する美德の元素を兼有するに
 あり、此等の元素とは即ち其一國一民に制限する狹隘心より
 自由なるにあり、其人情に訴ふるにあり、其純全高尚なる倫理
 の組織にあり、四海兄弟たる、愛は最も聖全なる者たる教理の
 存するにあり、理學家に對せば、此教は「ストイック」派の最高倫理
 の反響にして「フネート」派の最良教訓の發達なればなり、卑賤
 の理想に厭へる世に向つては、基督教は怜恤と慈愛の理想即
 ち今古世上に尤も大なる者又貴き者の中心となり標準とな
 る者、其友の墓に於て、涙を流し玉ふ師を示せるなり此教の成

功を奏したる主因は、其教訓と人心の相符合せるにあり、此教
 は其の根據を深く人心に得たり、蓋し其人々の宗教心、渴望、目
 的、感情と符合すればあり、蓋し其の感化力によりて全心發育
 擴濶なるを得るべければなり、と基督教の進歩を斯く其の固
 有の教理特質にありと論じたる、此の史家は斯く價值ありて
 勢力を有する宗教の原由を解釋せざりしなり、活ける信仰を
 以て、父なる獨りの神を信ずる者は、新約書中にある如く、斯く
 の如く、世界を一變一新する福音は、神の默示なることを信ずる
 は敢て道理に反するとに非らざるを見るべし。

基督教證據論 終

明治二十四年三月三日 印刷
明治二十四年三月四日 出版

(定價金十五錢)

翻譯者

三宅荒毅

仙臺市東二番町六十二番地

發行者

石本三十郎

東京府下窪原郡大崎村
字白金猿町八十五番地

印刷者

根岸高光

東京市牛込區市夕谷加
賀町一丁目廿三番地

印刷所

秀英舍

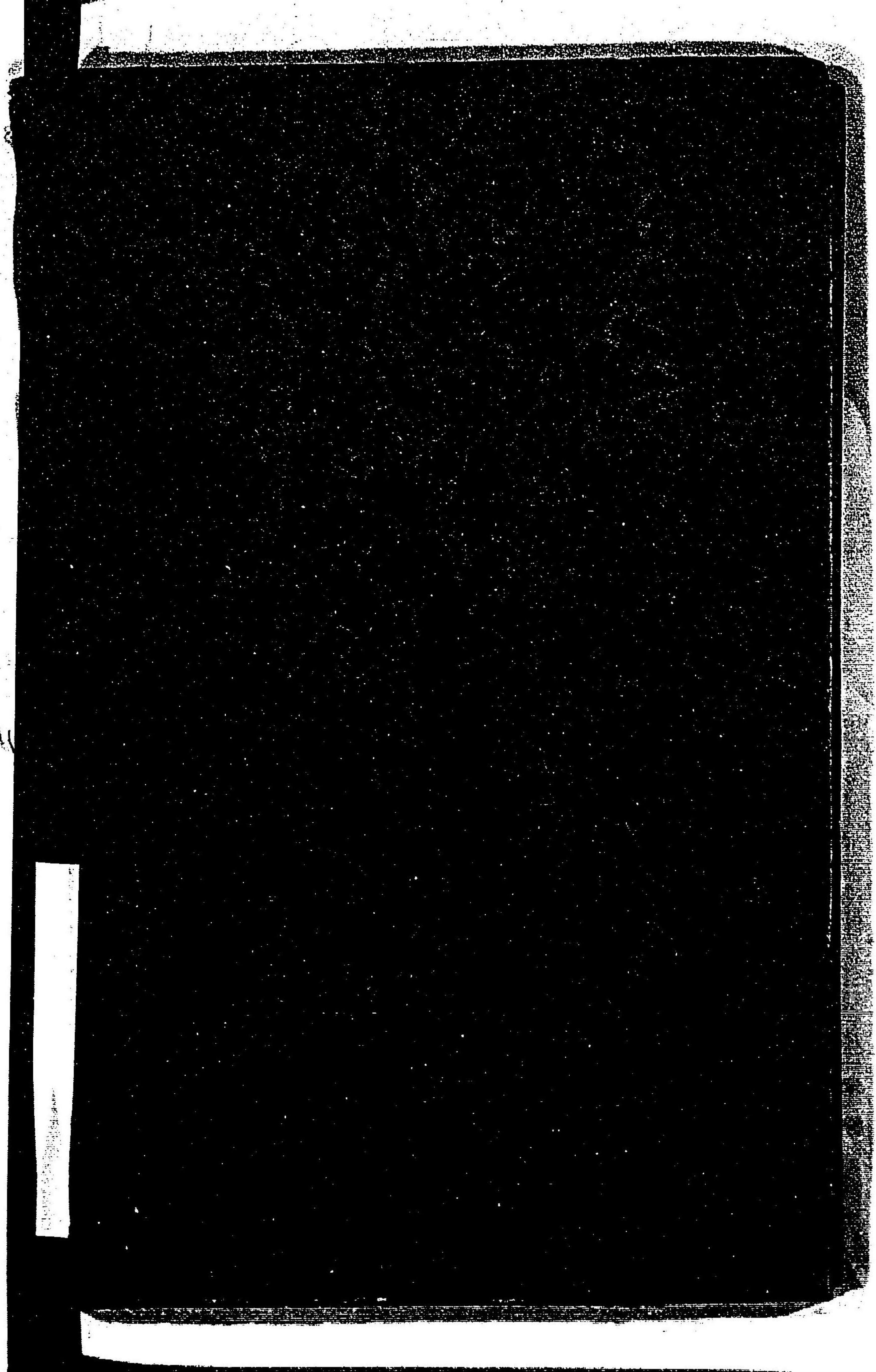
東京市京橋區西紺屋町
廿六七番地

3/36

19
210

[The text in this section is extremely faint and illegible due to the high contrast and grainy quality of the scan. It appears to be a list or a series of entries.]

[The text in this section is also extremely faint and illegible. It appears to be a continuation of the list or entries from the left page.]



Small white label on the spine with illegible text.